

本多猗蘭侯と南郭、東野

中 田 勇 次 郎

はじめに

前年度の論集第十七号においては、本多猗蘭侯と服部南郭についての研究成果の一部を紹介することができたが、今年度も、引きつづき服部南郭関係のことを補っておきたい。公と南郭との倡和の詩については、前回は南郭先生文集について見ることができたが、公の猗蘭台集の中の南郭に倡和したり、関係のある作については、言及することができなかった。そこで、今回は、猗蘭台集の中から、南郭関係の詩を拾集することとした。

もう一つは、今回は、同じく徂徠門下にあり、猗蘭侯とはとくに深い縁故のある安藤東野を取り上げてみることにした。東野のことは、論集第十六号にも多少触れておいた。ここではさらにこれを詳細に究めることとした。そこで実地調査の一部として、安藤東野の墓所を尋ねて、その碑文等の資料を探ることとした。東野の墓所は浅草の橋場町にある曹洞宗の寺院福寿院にあるが、寺を訪れて掃苔展墓するに、幸いにして碑は保存されていた。この拓本は藤井直正氏が作製された。ついで、徂徠門下の太宰春台の墓所を訪れた。谷中坂町の天眼寺にある。碑文は服部南郭の撰文、葛辰すなわち松下烏石の書丹にかかる名作であり、これも藤井氏によって拓本に取ることができた。さらにもう一人、同じく護国門下の平野金華の墓所を尋ねて、本郷区向ヶ丘町の蓮光寺の墓地にあることを知り、これも寺を訪れて拓本をとることができた。合せて三人の護国門下の人たち、いずれも本多猗蘭侯とはきわめて親密な関係にあった人たちである。そこで、その調査の結果をもふくめて、報告を兼ねて

本多猗蘭侯と南郭、東野

研究の一端を記すことにする。なお前号に紹介した服部文庫目録は昭和五十九年三月早稲田大学図書館において刊行されたことを付記する。

猗蘭台集中における南郭と唱酬の作

前号につづいて、本多忠統公の猗蘭台集から、公と服部南郭との唱酬した作を拾集して、主要な詩句については簡単に注釈を付することとする。前号に掲載した詩については、詩題だけにしておく。詩の本文は前号の頁を記入しておくのでそれを参照されたい。

徂徠、東壁、子遷、徳夫、漸陸、蔚宗、過飲。初稿三4 A

この詩は論集第十六号本多猗蘭侯と荻生徂徠九十八頁参照。初稿は公が神戸に移封される享保十七年より以前の作を収めている。南郭の名が他の護園関係の人たちとともに見えている。蔚宗の名は徂徠詩に送蔚宗七絶があり、護園門の人であろう。

暮春泰叡之後院与徂徠南郭春台漸陸蔚宗飲池上得遊字 初稿三14 B

この詩は論集第十六号九十九頁参照。

秋日与_ニ君瑞、子遷_ニ飲。時君瑞新嗣_ニ家世_一。初稿三31 A

高齋秋冷_レ拋_レ梧親。濁酒香_ニ蓴_一尚未_レ貧。君自青雲高_ニ志氣_一。誰為握_レ手醉醒人。

秋の日、本多猗蘭侯が、越智雲夢（君瑞）と服部南郭（子遷）と会飲した。このとき越智雲夢は新しく家督を嗣いだ。若くして貧しい雲夢に、将来の幸福を願ってその援助をそれとなく託した気持が出ている。

仲秋雨。子遷不至。賦贈。二稿一1 A

仲秋空_ニ月色。夜雨草堂中。三徑渺偏暗。孤灯独更紅。把_レ杯思_ニ雅興_一。懸_レ榻聽_ニ悲風_一。君有_ニ相如賦_一。怪君病亦同。

仲秋八月、雨のふる日、いつもやってくる服部南郭がやって来なかったので、詩を作って贈った作。相如賦は漢の司馬相如の賦。南郭が秋の雨のさびしい詩をおくってきたのに対する返事の作らしい。そのさびしい気持の同じであることを言ったものようである。

以下は猗蘭台集二稿に収めている詩。享保十七年（一七三二）、神戸移封以後、元文二年（一七三七）ごろまでの作になる。

逍遙館飲同_ニ南郭_一。賦_ニ得_レ暉字_一。二稿一 5 B

高台倚_ニ翠微_一。檻外照_ニ斜暉_一。酒熟玉山倒。坐閑白雪飛。香煙飄_ニ孔雀_一。歌曲落_ニ金徽_一。意氣論_ニ千古_一。吾曹豈擬_レ帰。

逍遙館はどこにあるかは未詳。服部南郭とこの館にて酒をくみ、「暉」の字の韻を得てつくった詩。玉山倒るは、美しい人物が酒に酔いくずれたさま。玉山は白雪の積った山の意があるので、次句の白雪飛ぶにかかる。意氣千古を論ずとあるのは、公と南郭が古今のことを論談して大いに意気を高揚して、帰るのを惜しんださま。

看_ニ子遷送別詩_一戲代_ニ其人作_一 二稿一 11 A

惜君楊柳有_ニ誰持_一。自折慙_レ勸送_ニ別離_一。攜得風光從_レ此去。帰来相怪陶家絲。

南郭の作った送別の詩を見て、たわむれにその別れた人に代ってつくった詩。陶家の絲は柳の枝をいう。

初春逍遙館讌。子遷至。席上賦酬。二稿一 18 B

草堂何所_レ饗。唯有一尊春。笑欲_レ賦_ニ鱸膾_一。為堪_レ沾_ニ酒巾_一。初筵梅半発。再会柳全新。願得縁_ニ餘沢_一。世言四経人。

初春、逍遙館の宴集に、南郭がやってきた。その席上で、南郭の詩に倡和してつくった作。四経人は徳仁義礼の四徳の備わった人の意であらう。

逍遙館春讌得_ニ歌字_一。席上贈_ニ子遷_一。二稿一 19 A

坐看鴻雁碧雲過。万里江山寒色多。不是陽春遲_ニ和氣_一。君家白雪入_ニ高歌_一。

逍遙館の春の宴集で、分韻して歌の字の韻字を得たので、その韻を用いて、席上で南郭におくった作。陽春白雪は楚の国の歌曲の名。こは山々のけしきは寒々として陽春らしくないが君の家では陽春白雪の陽気な歌が高らかにうたわれている意。

寄懷_ニ子遷_一 二稿一 25 A

壁立芙蓉出_ニ疊巒_一。雲中六月雪猶寒。請君自愛東方色。誰似一時天際看。

盆池夜夜乱_ニ蛙鳴_一。寂寞閑庭慰_ニ生平_一。相值相歡君自聽。何如鼓吹世間声。

南郭に寄せた詩二首。芙蓉は富士山。

本多猗蘭侯と南郭、東野

本多猗蘭侯と南郭、東野

仲秋集。時小亭新成。席上賦贈_ニ子遷_一。分韻人字。二稿二1A

亭窓寂寞隔_ニ風塵_一。高枕雲間月色新。共愛林泉与_レ秋霽。坐忘自是羲皇人。

仲秋の集会があり、そのときちょうど小亭が新築された。席上で詩をつくり南郭におくった。ときに、分韻して「人」字を得てつくる。小亭は坐忘亭のことであろうか。享保六年（一七二一）坐忘亭は江戸の藩邸に築かれた。二稿の詩は享保十七年以後の作であるから、坐忘亭ではないかもしれぬ。本学論集十七号十一頁に見える。羲皇上人が陶淵明の五柳先生伝にも出てくる。羲皇上人は上古の帝王伏羲より以前の古い人。

席上再贈_ニ子遷_一。二稿二1A

月下留_レ君明月杯。今宵不_レ醉未_レ須_レ回。由来自異穆生嗜。鯨飲人称八斗才。

坐忘亭上月将_レ円。秋夕相逢豈不_レ憐。海内同心今屈指。人生事事似_ニ桑田_一。

藩邸の坐忘亭における集会の席上で、南郭におくった詩二首。明月杯は夜光杯、玉杯。穆生、漢代の人、酒を好まず、宴会のときは特にそのために醴を設けた。酒ののめない人はどうかしているの意ならん。八斗才は才能のゆたかな人をいう。桑田は桑田変じて碧海となる。世の中の移り変りのはげしいたとえ。天下に心を同じくする人は指を屈して数えるほどになった。人の世の移り変りは桑田の変じて碧海となるようなものである。

酌_レ酒与_ニ子遷_一。二稿二5A

酌_レ酒相看心渺茫。春光到处傷_ニ愁腸_一。風塵無頼中原色。日月堪_レ驚兩鬢霜。林外閑花開_ニ野徑_一。雨餘蔓草滿_ニ池塘_一。生涯万事須_ニ酣飲_一。千載才名行樂長。

猗蘭侯は酒が好きであつたらしく、南郭とはよく酒を飲んでいる。これもそのときのもの。「生涯、万事、須らく酣飲すべし、千載の才名、行樂長し」という、酒をのんで楽しんで長命であることを願っている。

又賦併贈_ニ子遷_一。二稿二6A

一樽雨後為_レ花求。落日留_レ君惜_ニ此遊_一。亭上仮令無_ニ逸興_一。勿_下廻_ニ輕棹_一溯_中江流_中。

これも南郭におくった作。

和_二子遷見_レ寄醉婦作_一 二稿二17 A

歸後榻間空_二濁醪_一。城南月色照_二揮毫_一。一時狗監君何待。千載竜門心更高。坐裡忽看投_二玉璧_一。夜来再怪落_二蓬蒿_一。開_レ緘唯是臭蘭切。多少新裁不_レ厭_レ勞。

南郭から寄せられた醉婦の作に倡和した詩。狗監は、漢代の近侍の職、天子の獵犬飼養を主るもの。不正の官吏をいう。竜門は声望の高い人物。投壁は左伝僖公二十四年に見える語。信賴を得ること表す。落蓬蒿は野人に落ちぶれること。仕官のこと言っているらしいが、詩意は解し難い。

寄憶_二子遷_一 二稿二18 A

蝶夢覚来螢火明。經過堪_レ惜故人情。論_レ才万古耽_二詩賦_一。屈_レ指中原空_二弟兄_一。日落千重赤羽樹。雲懸百尺黃金城。勿_レ愁和者当今少。元是人間白雪声。

白雪は陽春白雪の歌をいい、和する者少しにかかることば。赤羽は地名。南郭がここに住んでいたのではないか。南郭に赤羽新居七律がある。

寄_二子遷_一 二稿二18 B

赤羽之水何清冷。南天一望緣_二山青_一。清風高臥子雲亭。奇子問者今誰在。牀頭蕭然太玄經。坐忘高枕心已閑。苦思文學游_二名山_一。鹿裘葛巾窮谷間。随意相憐唯君在。愧老風塵鬢毛斑。新裁幾許白雪篇。君家絶調誰能憐。引商刻羽朱絲絃。此曲人間不_二聞得_一。斂_レ手悵然嘯_二高天_一。

子雲は漢の楊雄、著書に方言がある。南郭を楊雄の家居に見立てて子雲の亭という。奇子問うもの今誰かいるは、まずしい儒者を問うものがないことを楊雄にかけていう。太玄経も楊雄の撰、易经に擬して著わした書。第三首の白雪篇は陽春白雪の歌。この詩は南郭が楽府をよくしたことを言っているようである。

桂花樓翫_レ月得_二中字_一 二稿二26 B

本多猗蘭侯と南郭、東野

本多猗蘭侯と南郭、東野

皓皓仲秋月。亭亭滿_ニ碧空_一。蓬蒿滋_ニ白露_一。林木落_ニ清風_一。我自酒狂態。君偏詩老翁。桂花持再酌。酩酊一樓中。

桂花樓の詩宴の作はきわめて多い。南郭とは会合すれば酒がなくてすまない状態である。この作もよくそのことがわかる。「我自らは酒狂態、君は偏_{ひとへ}に詩老翁」といつている。

八月十五夜与_ニ子遷_一酌_ニ酒席上賦贈_一 二稿二26 B

桂花樓上桂花秋。相對相酌皓月浮。君能知_レ愛与_レ我醉。我亦偃伏与_レ君游。窈窕清影照_ニ枕簟_一。蕭条輕風入_ニ簾櫳_一。簾櫳坐靜餘響長。音偉声麗星河流。聽者躊躇傾_ニ志情_一。高調紛綸數十行。此曲人間常希有。邀_レ月拳_レ杯醉裡成。非_レ君誰能為。非_レ我誰復知。君不_レ見。千里之馬何可_レ無。黃金之台豈論_レ時。蹇驢驚駭食_ニ苜蓿_一。驢驪驪驪空勞疲。又不_レ見。峻嶽之崇岡椅梧長。触雲觚霞鬱清壯。杳藹隱深不_レ可_レ見。愀然千載待_ニ良匠_一。匠石之斤離子墨。何時為_レ琴得_ニ其狀_一。我聞牙期一知己。今夜相逢又相似。請君為_レ我尽_ニ百盃_一。我亦擊_レ筑歌無_レ已。醉中同狂意如何。願共_レ君羽化為_ニ赤松子_一。

仲秋名月の日に、南郭とともに酒をくみ、その席上でこれをつくって南郭におくった作。桂花樓はその保養のために設けたところ。論集第十七号本多猗蘭侯と服部南郭十四頁に詳説した。この夜は酒をのんで歓楽を尽したらしく、この詩はあたかも李白の古詩のようで、その豪快な情緒がよく表れている痛快な作である。

八月既望対_レ月懷_ニ子遷_一 二稿二27 B

昨夜与_レ君明月篇。今宵与_レ誰流水絃。明月流水相調和。月落絃罷自蕭然。倚_レ檻望_レ月月影滅。昨夜清光益可_レ憐。杯盃簾上秋風冷。筆墨榻下白露鮮。晚晚老鬢更多_レ欠。紛拏風塵何屑屑。君能対酌披_ニ腹心_一。我亦対_レ君養_ニ此拙_一。明年明月又相期。勿_レ忘勿_レ違我思切。

君不_レ見。富家吹歌鄭衛声。非_レ倡_ニ白雪_一却成_レ名。又不_レ見。鬪雞射雉游俠子。羅綺錦繡意氣生。共笑顏氏簞食態。又言揚子疎_ニ世情_一。豈異投壁人按_レ劍。燕石十襲価連城。悲歌非_レ君吾何唱。正是天地一弟兄。

前の八月十五夜の翌日、十六夜（既望）の作であろう。「昨夜君と与にす明月篇」ではじまるのがそのことを示している。南郭との心の交りのこまやかなところは「君よく対酌、腹心を披_{ひら}く、我も亦君に対してこの拙を養う」という句にあらわれている。また、「悲歌、君に非ずんば吾、何ぞ唱せん、正に是れ天地一弟兄」というなども、南郭とは兄弟のような交りであることがわかる。

九月一日燕成章館。子遷至。席上分韻。得深字。二稿二28 B

為有臥游趣。座中客自深。菊花先九日。竹葉酌重陰。偶得相如賦。堪彈知己音。醉醒君与我。千載任同心。

成章館は猗蘭侯が江戸の藩邸の中に設けた学問所である。論集第十七号十二頁参照。この詩は成章館の宴集に、南郭がやってきたとき、席上で詩韻を分つて、公が「深」の字を得てつくった作。臥游は南朝の宗炳が壁面に山水図を描いて臥したまま画中の山水に遊んだ故事。「菊花先九日」は九月一日は菊花節句の九月九日に先だつこと九日の意。

子遷二稿成。賦此寄与。二稿三6 A

聞説泰山日月高。何似東方芙蓉色。即看君翮自握中。白雪人間有誰得。

南郭文集の第二稿が成つたので、この詩をつくって寄せたもの。この南郭の二稿には、猗蘭侯の元文二年（一七三七）の跋があり、この詩はちょうどそのころに作られたものと思われる。

穀日登蘭台得催字。二稿三8 A

菜羹已昨日。今日飲蘭台。雲尽芙蓉出。日温氣象開。柳廻堤上嫩。帆度海門来。総為春光早。城南游意催。

穀は穀の俗字。穀日は吉日、陰暦正月八日をいう。蘭台は猗蘭侯の邸をいうことが多い。これもそうであろう。席上分韻して「催」字を得てつくった詩。

成章館春讌。分韻春字。今日子遷至。因賦此贈之。二稿三9 A

羨爾高歌独自新。郢中欲和更無人。請看雪色為君落。落尽梅花笛裏春。

成章館の春の宴集において、詩韻を分配し、「春」の字を得た。その日、南郭がやってきたので、この詩をつくっておくったもの。郢中は春秋戦国時代の楚の都のあった郢の地方をいう。ここでは卑俗な楽曲が流行した。宋玉の「対楚王問」に、「客に郢中に歌うものあり、その始めは下里巴人」という。國中、属して和するもの数千人」とあり、俗曲に倡和するものが多い故事に用いる。南郭の樂府が上手であるので、それに倡和できる人は一向にないといって賞したことば。末二句は樂府の梅花落をとってその情緒をあらわしたことば。

又子遷見贈詩。席上和荅。二稿三9 B

本多猗蘭侯と南郭、東野

本多綺蘭侯と南郭、東野

詩賦東山花外花。憑君春酒弄春華。不然何得芳菲色。今日風流入謝家。

南郭から詩をおくられたので、席上でそれに倡和してつくった詩。謝家は南朝の貴族の名門。風流文雅な生活をしていたので風流の語がある。東山は晋の謝安の東山妓の故事をふまえるであろう。東山は東晋貴族の遊樂のところ。江戸で東山は上野をいう。地名箋に見える。

子威来飲成章館。初未知。偶看其詩。因驚喜。率爾作寄。二稿三10 B

堪愛新詩坐裡新。光如珠玉共相親。我憐濁酒与黃鳥。開絨尊前轉醉春。

子威（伝記未詳）が成章館の宴集にやってきた。はじめは知らなかったが、たまたまその詩を見て、その詩才のあるのにおどろき、即座に詩をつくっておくったもの。開絨は詩稿を開いてみての意であろう。

成章館雨集得情字。二稿三20 B

成章館裏長夏日。霖雨寂寞絕世情。劇喜服生忽問訊。率爾下榻愛同盟。金尊玉碗豈新設。高陽狂伴高酒名。散髮箕踞任疎懶。擊筑放歌似高生。今日良会共酣飲。皆避三舍君独鯨。又且彩筆千秋事。誰能与君此縱橫。座裡秉燭又相勸。有酒如河豈不傾。

雨の日、成章館の宴集において、分韻して「情」の字を得てつくった詩。句中に「劇だ喜ぶ服生、忽ち問訊す」とあり、突然、南郭がやってきたので、さっそく会合に加わってもらったことを記している。高生は高陽酒徒、漢代の故事による。酒飲みをいう。「今日良会共に酣飲、皆、三舍を避く、君ひとり鯨なり」とあり、大いに酒を飲んだ。皆が三舍を避けているのに、南郭ひとりが鯨飲した、というからよほど大酒したと見える。末句にも「酒あり河のごとし、豈に傾けざらんや」というから、ずいぶん痛飲したようである。

懷子遷。二稿三22 A

日夕望南丘。浮雲渺且茫。霜痾今心痊。何問肘後方。徐步垂楊下。灌園愛荀薑。我唯燕雀翼。不得与鴻翔。雖恋千古思。不堪九回腸。世情若波瀾。官事正面牆。拳嗜臭腐肉。焉能養鳳凰。采寵似朝露。不如此酩酊狂。冀縱心山水。共佩蘭蕙香。此約正暨百。風塵一何長。

南郭を懷う詩、采寵は朝露に似たり。しかし、酩酊狂なるに、ねがわくは心を山水にほしいままにし、ともに蘭蕙の香しきを佩びん、という。このような気持は、南郭と同様であったようである。

秋暑殊甚。七月望。集成章館。此日也。涼風適至。滿坐披襟。得生字。二稿三25 A

成章館裏晚風生。琥珀杯中酒亦清。坐上偏吹点塵尽。臥聞庭樹総秋声。

秋の暑さのまだきびしい七月十五日、成章館に集会をした。この日はたまたま涼しい風がふき、一座の人々は襟を披いてこのそよ風にふかれた。分韻して「生」の字を得てつくった詩。

桂花楼和子遷席上作 二稿三27 B

清讌楼頭揮彩毫。中原意氣為君豪。捲簾近射天边月。当座遥飜海上濤。室内声名憐病渴。風前鬢髮只香醪。裁成今日仲宣賦。不讓登臨百尺高。

桂花楼において南郭の席上の詩に倡和してつくった詩。清讌楼頭、彩毫を揮うとあるから、席上で画をえがいているようである。仲宣は魏の王粲のあざな。王仲宣に有名な登楼賦がある。王粲の登楼賦にもまけないような作ができたという意気込みを示している。

桂華楼賞月得看字 三稿一3 A

楼上平臨水葉丹。留君終夕此交歡。盤飧秋熟青尊淨。杯酒霜清黃菊寒。万里晴光開海嶽。一尊風色落欄干。停毫想得謝莊賦。宵宴方憐月裏看。

桂花楼の詩宴はたびたび催された。これは賞月の宴集で、分韻して「月」字を得て作った詩。南郭に同題の詩がある。

九日登楼憶子遷 三稿一3 B

楼上清風入酒杯。黃花寂寞席邊開。定知君有竜山約。今日誰能落帽回。

白雲雨後散江風。濁酒黃花已不空。竟日登臨愛秋色。醒來高臥一樓中。

傾尽青尊醉裏長。樓南回首憶君狂。世間不解酒中趣。落帽風前双鬢霜。

九月九日、登高の日に、楼に登って南郭を憶ってよんだ詩。竜山約は、晋の孟嘉が、竜山における重陽の節句の会に招かれたが、風に吹かれて帽子を落した故事による。約は盟約。黃花は菊花のこと。酒中趣は同じく孟嘉の故事。孟嘉が桓温の参軍となり、酣飲を好んだ。温が、酒のどこによいところがあってそんなに好きなのかとたずねると、嘉が答えて、公はまだ酒中の趣を会得していないからであると

本多騎蘭侯と南郭、東野

本多猗蘭侯と南郭、東野

いった故事。この詩以下は猗蘭台集第三稿に収められている作で、この稿には、享保二十年（一七三五）ごろから、寛延三年（一七五〇）ごろまでの作をのせているので、ほぼこの期間の作に属する。

暮秋送子遷遊遠郊 三稿一4B

把酒高楼留醉君。郊南秋葉散紛紛。風流想像琵琶曲。曲就堪停馬上雲。

秋の暮、南郭が遠い郊外に遊びにゆくのを送ってよんだ詩。

初冬停雲館讌集分韻園字。此日也。子遷不至。因兼賦寄憶之意。三稿一5A

相逢投轄停雲館。酒伴拳杯遊後園。唯恨空懸徐孺榻。誰傾偏滿孔融尊。菊花霜裏黃將變。楓葉風前紅已翻。枕麴藉糟今日事。從來酒德睨乾坤。

初冬に、停雲館において宴集があり、分韻して「園」の字を得てつくった詩。この日、南郭がやってこなかったので、詩をつくってこれを憶うところをよせた作。停雲館は論集第十七号十一頁参照。投轄は漢の陳遵が酒をこのみ、客と大飲すること、その車の轄（くさび）を取って井戸に投じ、急用があっても帰らせなかった故事。徐孺榻は、後漢の陳蕃が榻をかたずけてしまつて徐稚以外の人に面会しなかった故事。孔融の尊は、漢の孔融は賓客を招くことを好み、坐上賓客恒に満ち、尊中、酒、空しからずという故事。枕麴藉糟は、劉伶の酒徳頌にあることば、飲酒におぼれること、末句の睨乾坤も、劉伶が幕天席地、天地をわが家のようににらみつけたという故事による。およそ、南郭とはいかに飲酒の縁の深かったことは、どの詩を見ても酒のないものはないくらいである。

停雲館春讌席上贈子遷得林字 三稿一8B

佳人明值停雲館。啼鳥近馴高樹林。起折梅花為浮酒。坐看柳色對彈琴。豈忘老病青山夢。堪弄親交白雪心。醉後如泥是生事。從他蓬鬢不勝簪。

停雲館における春の宴会の席上で、南郭に贈った詩、分韻して「林」字を得てつくった作。青山夢、白雪心を對句にする。青山は故郷の緑の山々をいうか、白雪は陽春白雪、歌曲のことをいうか。

仲秋桂華樓飲。今夜未ト陰晴。得天字。席上贈子遷。三稿一15A

日將暮兮雲掩天。良宵晴陰憐風煙。拳杯共待皎潔影。悵然坐吟謝莊篇。秋思未晴酒已闌。謾摘盤果散醉眠。君不見。黃河之水無清時。人世之樂亦如斯。四十九年對明月。半是與君此追隨。唯喜縱飲兩白髮。酩酊相憐不朽期。

仲秋八月、桂華樓において酒を飲む。今宵は、空模様をまだうかがっていない。名月のころかと思われる。杯をあげて月影の出るのをまわっているときの作。分韻して「天」の字を得て、席上で南郭におくる詩。四十九年、明月に対する句があり、この四十九は四十九歳（元文四年、一七三九）のことであろう。謝莊は六朝宋の詩人。山夜憂、懷園引などの詩篇がある。南郭に、中秋桂花樓飲今夜未卜陰晴詩（三編一6A）がある。同時の作であろう。

晩秋与子遷飲得林字 三稿一16B

相對一尊酒。笑談意已深。青雲非我志。明月見君心。坐睨蒼竜闕。興憐楓樹林。醉中秋欲晚。流水惜知音。

晩秋九月のころ、南郭と酒をのみ、分韻して「林」字を得てつくった詩。

与子遷飲書堂 三稿一20A

為看風月清。林外草堂成。樹有含煙色。流伝激石声。老來勞世事。醉裏養浮生。太喜君過訪。今宵復解醒。

書堂は猗蘭侯の邸内につくられた書斎のこと。論集第十七号十二頁に見える。猗蘭台集初稿卷五に書堂記がある。その話はこの書堂の成ったときの作。解醒は二日酔いをさますこと。

庚申夏六月。予為五十初度。諸君賦詩見賀設讌蘭台。分韻池字。兼賦主恩云。三稿一24B

勤我杯尊寧可辭。蘭台朱履設筵時。座中歌聽太平化。案上詩同千載替。雲霽上林開玉殿。風來層闕渡瑤池。都將恩沢介眉壽。飲樂何知白日移。

元文五年庚申の歳、夏六月、公は五十の誕生日を迎えた。公は元禄四年六月十八日生。その祝賀の宴が公の邸で催された。公は韻を分けて「池」の字を得たので、并せて主君の恩を謝して詩をつくったものがこれである。このとき南郭に寿序并詩がある。論集第十七号、三十二頁参照。

夏日桂華樓飲得門字 三稿二14A

本多猗蘭侯と南郭、東野

本多猗蘭侯と南郭、東野

夏簾投_レ楼上_一。清風簾欲_レ翻。趣同孺子榻。興傲孔融樽。更喜共青眼。相忘自漆園。醉來君勿_レ厭。纖月出_二城門_一。

南郭に同題の詩があり、同時の作であろう。

晚秋此君亭飲。席上贈_二子遷_一。三稿二15 B

再催菊後菊花杯。相對尊前醉色開。美酒如_レ泉且須_レ酌。請君乘_レ興去還來。

晚秋九月、此君亭で酒を飲み、席上で南郭に贈った詩。菊後とあるのは、重陽の節句の過んだのちをいうであろう。

雨中子遷子式烏石集桂花樓得寒字 三稿二21 A

今雨留_レ君欲_レ罄_レ歡。莫_レ如_二但使_レ對_レ尊蘭_一。山遙煙霧九天暗。江近杯盤五月寒。長夏樓中開_二筆硯_一。一時壁上掛_二衣冠_一。為_レ緣_二琴酒_一迎_二嵇阮_一。聊作_二風流_一林下看。

雨の中で、南郭（子遷）高野蘭亭（子式）松下烏石が桂花樓に集会し、分韻して「寒」の字を得てつくった作。嵇阮は嵇康と阮籍をいう。嵇康が琴、阮籍が酒ということになる。林下は竹林七賢をさしている。集った諸賢を古人にたとえている。

懷_二子遷遊_二玉笥山_一 三稿二22 A

羨君坐裏數峯看。風雨中夏日寒。縱使_二登仙忘_二世界_一。再期鳬鳥下_二雲端_一。

玉笥山頭風月清。吟_レ詩酌_レ酒無_二他情_一。東方炎熱人皆苦。日夜待_二天甘雨聲_一。

南郭が玉笥山に遊びにいったのを懷うてつくった詩。玉笥山は相州箱根をいう（徂徠、送蔚宗七絶）。また、玉函山ともいう（南郭寄莊子諒七絶）。玉笥（南郭題芙蓉樓七律詩）、玉笥峰（南郭重遊玉笥七律）などの称がある。地名箋相州の条に見える。鳬鳥は、後漢の王喬は河東の人、顯宗の朝、葉県の令となった。喬は神仙の術を知っていた。毎月の朔望には、はるばる県から登朝した。ところが、かれが来るときには、車騎の姿が見えないので、そっと太史にこの様子をうかがわせると、かれの出仕するときには双鳬（二羽の鳬）が東南の方から飛んでくる。そこで羅（あみ）を張ってこれを捕えたところ、一足の鳬を手に入れただけであつたという故事。ここは箱根の仙境のようなところへ行っても、また下界へ戻ってくるであろうの意をこの故事をかりていう。

桂花樓与_二子遷_一分_二詩牌_一戲作 三稿三2 B

堪_レ憐一日飲_ニ高楼_一。賓客何分塵外遊。鳳闕雨從_ニ晴靄_一掛。上林雲隔_ニ北風_一浮。小篇隨筆賦_ニ長思_一。滿酌回杯破_ニ旧愁_一。向_レ暮輕煙吹欲_レ竭。紅荷遙見_ニ竜池舟_一。

桂花樓において南郭と詩牌で分韻をしてたわむれにつくった詩。

八月望夜与_ニ子遷_一飲_ニ桂華樓_一 三稿三3 B

与_レ君对酌月明樓。濁酒清尊良夜遊。相喜年年兩霜髮。醉醒不_レ減桂華秋。

八月十五日の夜、南郭と桂華樓で酒を飲んだときの作。

寄_ニ子遷_一 三稿三22 B

喬也不_レ見久。何為隔_ニ交情_一。狂夫病三歲。痛_レ腰扶_レ人行。又且辞_レ職去。遂為安_ニ処生_一。懶性游_ニ方外_一。不_レ須称_ニ幽貞_一。唯愁冠冕客。時妨_ニ生平_一。親疎一謝絶。杜_レ門掩_ニ虚名_一。頃知真隱狀。稍得禁_ニ蛙鳴_一。小樓八月近。觀_レ濤杯尊傾。相思知己感。乾坤一弟兄。行路直如_レ砥。為来馬蹄輕。

南郭に久しく会わない。何とか会いたいものである。自分は三年ほど病気で、腰が痛むので人に助けられて歩行している。その上、官職もやめてしまって、家にくつろいでいるだけである。浮世のことから離れたのであるが、官吏たちが私の生活のさまたげをするので、親疎にかかわらず面会を謝絶して、門をとざして名利から遠ざかった。ちかごろやっとほんとうの隠居の状態になった。八月近くなり、海の波濤をながめながらあなたと杯を傾けたいとおもう。路はまっすぐだから気軽にやってきてほしい。あなたは私にとって兄弟のようなものであるから、という。「乾坤一弟兄」は、前出の八月既望对月懷子遷詩に、「天地一弟兄」とあり、公と南郭とは、兄弟のように親密であったことがわかる。この詩は、二人の友情のこまやかさがよく描かれている。時期は、寛延三年（一七五〇）若年寄を退き、高輪の別邸に隠居するときのものであろう。蛙鳴は世間の雑音をいう。

八月十五夜登_レ樓看_レ月懷_ニ子遷_一 三稿三25 B

望夜登樓坐。明月出滄浪。寒光懸_ニ金鏡_一。清輝盈_ニ屋梁_一。豈問_レ遊_ニ城闕_一。斯中乃其郷。拳_レ觴憶_ニ知己_一。擊_レ筑想_ニ清狂_一。宿昔今宵会。依違盤_ニ交情_一。談笑忘_ニ彼我_一。詩賦成_ニ篇章_一。酒酣発_ニ歌曲_一。興熟弄_ニ琴笙_一。相阻非_ニ各天_一。旧痾久為_レ妨。参商雖不_レ比。神交何可_レ傷。白

本多猗蘭侯と南郭、東野

本多猗蘭侯と南郭、東野

露侵^ニ短衣^一。清風払^ニ胡床^一。醉氣坐勃然。月色到^ニ五更^一。

八月十五夜、楼に登って月をながめ、南郭を懷う詩。中秋名月の日にはかならず会合して詩をたのしんだらしく、その作はきわめて多い。しかも、たいていそのときは南郭と酒を酌んでいる。

仲秋対^レ月懷^ニ子遷^一 三稿三1 A

憶君同飲桂華楼。狂態相逢知^ニ幾秋^一。老去山居空看^レ月。何時再得^ニ庾公^一遊。

仲秋、月をながめて南郭を懷うてつくった詩、庾公は晋の庾亮、ここは南郭を庾亮に見たてていう。年老いて、また昔のように南郭と酒をくんで月をながめたい、という。高輪に引退してからの作であろう。南郭とは最晩年にいたるまで詩の唱酬をしていたことがわかる。

猗蘭台集中の南郭に与えた書牘

書牘

猗蘭侯が南部に与えた書牘の文が、猗蘭台集の各編に多数収められている。ここでは、漢文のものばかりであるが、南郭とはとくに親密であっただけに二人のこまやかな交遊のあとをうかがうことができる。全文を掲げるのは煩雑にわたるので、書牘の名称だけにとどめ、主要なものは解説にゆずることにする。なお、初稿には「書牘」と題しているが、二、三稿は「文」と題して、雑文中に収めている。今、これをまとめて書牘とした。およそ三十通ある。

1 与 子 遷 不佞為疾、適今一句、性愈懶惰、而事出意外、愉悅如触籠之鳥矣、云々 初編六7 A

2 寄 南 郭 盛哉吾夫子修道明復古也、云々 初編七4 B

3 寄 子 遷 勿謂足下嗜酒、僕辱其餘瀝 初編七8 A

4 復 南 郭 統也惰夫不足与論才、而辱足下高誼、云々 初編七15 A

5 寄 子 遷 子遷如何、寡人有願、寡人果哉、 初稿七27 A

- 6 寄 子 遷 無恙頃猗蘭台集成焉、取之誦之、未嘗不覩然汗顏也、 初編七 33 A
- 7 与 子 遷 子和嘗憂焉使非吾嘗者、 初編四 4 A
- 8 与 子 遷 足下自愛足下如何、 二稿四 6 A
- 9 寄 子 遷 疇昔為梓使家僕習字、 二稿四 8 B
- 10 又 名山大川之觀既已入陽春、陽春之氣其盛哉、 二稿四 9 A
- 11 又 花箋之画乃如足下之言、葉蘊未佳、 二稿四 9 B
- 12 与 子 遷 子遷如何、不佞有遠遊之志久矣、 二稿四 12 A
- 13 与 子 遷 法象草大乎天地、變通莫大乎四時、 二稿四 14 B
- 14 与 子 遷 醒而誦足下詩、古調亦復驚人、誠得之也、 二稿四 16 A
- 15 与 子 遷 昨余得二十四聖賢純孝画跋、明人数輩皆賞翫、仇実父画妙之語也、 二稿四 20 B
- 16 与 子 遷 茫然絕目而望足下遠游、今如何、 二稿四 22 A
- 17 重答子 遷 宋人宝燕石緹巾十襲謂五城、不当古今愚之不異可知哉、 二稿五 1 B
- 18 寄 子 遷 頃博士等猷公孫降誕祝詞、板生亦与焉、 二稿五 3 B
- 19 寄 子 遷 歲已新回条風徐吹、 二稿五 16 A
- 20 与 子 遷 甚哉俗紛紛乎大雅、未聞雅能妨俗、是実俗之所為乎、抑亦天乎、 二稿五 17 A
- 21 寄 子 遷 頃再觀婦去来本画、即以足下所為而比視焉、不失一毫、精神亦嚴然、 二稿五 17 B
- 22 寄 子 遷 大雪如何、赤羽之下、舟之有不、 二稿五 25 B
- 23 答 子 遷 書至、書至則如面、如面而不面、別之難為情也、 二稿五 27 A
- 24 与 子 遷 雖雪而天氣澄和、是則勾芒所為、実其徵哉、 二稿五 28 A
- 25 寄 子 遷 不佞嘗謂、不佞懶惰然於文事不然、而亦有之哉、 二稿五 29 B

本多猗蘭侯と南郭、東野

- 26 寄 子 遷 統之才不足執天下事、以量其可否、 三稿四 10 A
27 寄 子 遷 小苑之山池已成矣、松之鬱然殆似歷年、 三稿四 13 A
28 寄 子 遷 余嘗謂富貴何所願、貧賤何所悲、 三稿四 14 A
29 与 子 遷 足下大飲無恙、不佞本不可同日語也、 三稿五 24 A
30 与 子 遷 不見足下久矣、唯時時聞家僕松清隆之言、 三稿五 25 B

1、この文には、南郭が平野金華(子和)に送った文と安積澹泊に寄せた書簡を見て、漢魏をたつと古文辭の論に感激したことを述べている。
2、宋学の非をとぎ、伊藤仁斎が出て、宋儒の誤をのべたが、まだ十分ではないとし、我々の復古の学をひろく世に伝えようとすることをいう。
4は、芙蕖館帖に収めた三通のうちの第二通がこれにあたる。論集前号四十六頁参照。この文には、方今、徂徠先生出でて、弁道、弁名、論語徴数巻を著して先王孔子之道を発明した。孔子が没してのち、諸家が鼎沸したが、ひとりこのことは聞いたことがない、と言って、徂徠の復古字を説いている。5は、大上立德、其次立功、其次立言という、徳、功、言の三要項をとりあげて政治家の道をといたもの。6は、猗蘭台集が成ったことについて、自ら反省する意をのべたもの、9には守屋煥明(秀緯)の書法のことのべられている。11には花箋の画のこと、芙蕖館帖に収めた三通の中の第一通は花木の下画の箋を用いている。あるいはこういうものを言ったかとおもう。14には南郭の古調の詩をよみ、その作に驚いている。16には松下烏石の書を社中の珍と称している。17には、文徵明と董其昌の書を手に入れたことをのべている。18には板生とあるのは板倉復軒のことであろう。19は芙蕖館帖にある三通のうち第一通はこの書簡と文が近い。おそらく同時のものであろう。20も芙蕖館帖のなかの三通の第三通とほぼ同文である。帖では三月十九日付けになっている。21には成章館の額字を松下烏石が彫っているのをほめている。25には、徂徠の墓碑の書を依頼されて、そのままになっていたことを弁解している。公が書いたのは元文四年(一七三九)で、徂徠の没年享保戊申(一七二八)ののち十二年目である。26以下は三稿に収めたもので、晩年の生活とその心境をよく書きあらわしている。

29の書牘に、

「あなたは大酒を飲んでつつがなくおすごしとおもいます。わたくしなどはあなたと一緒にくらべものにはなりません。のみならず、このごろはまた新しい病気がおこって、酒をのめばくるしいし、やめると楽になりますので杯を手にするのはすっかりやめて三十日になります。風雅

なおもしろさもなく、すっかり俗っぽいものになってしまつて、いよいよますますあなたにしりごみをして三舎を避けたいわけにはゆかなくなりました。そんなわけでもないにち、することもなく、ひとり寂しくて、杖をついてゆっくり歩きながら、庭の梅のさいたりちったりするのをながめたり、池の魚の泳いでいるのに相手になつたりしています。空がくもつて寒い日には、^{いろり}炬の火にあたつてじっとしています。そばにいる人が、わたくしを見て、木猿人（猿）のようだと言います。今日このごろ、春の日ざしがのどかであたたかく、人のころのうき立つ時節ではありませんか。こんなときに、杯をすてているなどは、吾が党の雅量をすっかり失つたようなものです。ただこれも病気のせいで、いかんともしかたがありません。等揚の画数軸をもつて来ました。山水人物はみな真に逼っています。水は流れるように、雲は浮ぶように、草木は風にゆらぎ、老少は語りかけるかのごとく、鳥獸は飛びはねるように、山丘岩石までもいかにも自然に似て、高くけわしくきびしくそばたつさまは、まことにすばらしいものです。どうか見に来て下さい。あなたのために新しくつくらせた春酒を用意しておまちしています」と、という。

南郭とは晩年まで終始酒の友だちとして意気投合していたさまがよく描かれている。

30の書牘に、

「久しくお目にかかりませんが、ただときどき家の下僕からあなたが達者でいられることをうかがつて安心して 있습니다。ことしはたいそう暑いことで、いまだに涼しくならず、世間では流行病がはやっています。あなたはおかわりはないでしょう。私はながく腰の痛みになやんでいます。晩春から今日まで、あいかわらずまだよくありませんので、たいそう困っています。ねたりおきたり、朝夕、人にたすけられ、杖をついてやっと身体を動かしている始末です。しかしながら、幸いに命には別条はありませんから、どうか御心配しないで下さい。ちかごろまた庭いじりをして、別荘に庭をつくっています。ちょうど上手な職人がいたので丘壑の天然のおもむきをつくつて、小石をつみあげて山の峰をつくつたり、竹木をうえて幽邃なおもむきを出したり、双つの峰の間に、石ころのある激流をつくつて、泉がとびちり、とびちつた泉が池に流れこんで、ぐるぐるとまわつて山のふもとのところまでゆく、そこには秋草がうえてあつて、野趣があるという、およその上手な職人が造つたものであります。庭作りの手間はかかりますが、老の身の楽しみとなれば、それも惜しいとおもわれません。あなたもこの方は趣味があるようですから、おしらせしておきます。八月十七日、忠統頓首」とある。晩年の高輪に隠居していたころの生活がよくうかがわれる。

猗蘭台集中の南郭関係の雑文

本多忠統の猗蘭台集には、また、南郭関係の雑文がある。服子遷歸去来模画跋がその一つである。これは南郭の模写した歸去来図で、もとの画の筆者は、明の陸治（叔平）とされているものである。これが陸治の作といわれるが、この筆意をよく見ると元人の作のようであると南郭が言っていたのに同感であることを述べている画跋である。丁巳冬とあって元文二年（一七三七）のものである。もう一つ、送子遷西游序がある。延享二年（一七四五）春三月、南郭が関西へ旅行するときの送別の言葉である。むかしから誰かが賞賛すると世間の人が、それほどでもない景色をめずらしがるものであるということを言い、また、南郭が関西へ行けばよい詩をつくるであろうということを言っている。芙蓉の峻（富士山の高い美しさ）東海の淼（東海道の海の景色のすばらしさ）、雲雨驚濤の觀（ながめ）はいつもながら壮大であるといつて、関東の景色の方をほめている。もう一つ、成章燕稿序がある。成章館で集会して作られた詩稿を集めて墨刻としたものを成章燕稿と名づけ、公に序文を請うたものである。公と南郭と平野金華（子和）がしばしば一緒にになって詩をつくった。この序をかいているのは丁巳すなわち元文二年（一七三七）のことで、ときに金華はもうすでに亡くなっている。享保十七年（一七三二）に没しているので、それで、かつて南郭と金華とは、いつもたのしく詩をつくったが、今は金華はいない。今、私（公）が南郭と遊ぶのは、かつて金華と一緒に楽しんだときのようなものである。南郭が子弟にいいねいに詩を教えている。その作品を集めて、そのために書いたのが、この序文である。南郭と金華と猗蘭侯とのいかにも親密そうな関係がよくわかる。

猗蘭台集中における安藤東野との唱酬の作

猗蘭侯の猗蘭台集の中より、公が東野らとともに集会したときの詩、また公が東野に送った詩を拾ってみる。さきに、徂徠、南郭の関係資料中にも同様のものがあるので、重出するものは詩の表題だけにとどめておく。

初春憶_二徂徠東壁_一 初稿二2 B

論集第十六号九十四頁参照。

徂徠東野至、同賦 初稿二3 B

論集第十六号九十五頁参照。

三月廿二日与_二徂徠_一訪_二東野先生之館_一聊賦 初稿二6 B

論集第十六号九十六頁参照。

席上憶_二東野_一得_二沈字_一 初稿二9 B

衡門一酌憶_レ君深。雪滿扁舟不_レ可_レ尋。十載吾曹虛屈_レ指。千秋此道少_レ論_レ心。東山自掩卧龍室。南国独歌衰鳳吟。意氣弟兄常相值。豈思雙鯉有_二浮沈_一。

集会の席上において、東野を憶うてつくった詩。分韻して「沈」字を得てつくっている。

秋日贈_二東野_一 初稿二11 B

城北棲遲秋葉紅。偏憐逐客草堂中。歌篇白雪無_二人和_一。台上黃金独自空。賦就當時堪_レ側_レ目。才高千古好称_レ雄。更思吹笛関山月。共抱_二一樽_一清宴濃。

秋の日に公が東野に贈った詩。棲遲はゆっくりと遊びに出かける。おそらく東野の住んでいた家へ行ったのであろう。東野は駒込の商山（白山）に居を構えていた。逐客は仕官していない人で、ここは東野のことを言うであらう。白雪は陽春白雪の歌曲、倡和するもの千人であったという。黄金台は賢士を招いた故事があり、この句も不遇をいう。関山月は漢の楽府題、故郷の月。

仲夏同_二徂徠先生及東壁、大潮、子帥、君彝、賦得_二流字_一 初稿二13 B

論集第十六号九十六頁参照。

徂徠東壁至、分韻 初稿三1 B

論集第十六号九十七頁参照。

本多猪蘭侯と南郭、東野

本多猗蘭侯と南郭、東野

徂徠、東壁、子遷、徳夫、漸陸、蔚宗、過飲 初稿三4 A

論集第十六号九十八頁参照。

東塾著園燕集得名字 初稿三6 A

晋後風流酒亦清。醉操玉軫且吹笙。彈成尤愛広陵調。不借山陽自有名。

東野の著園において宴集したとき、分韻して「名」字を得てつくった詩。著園は東野が東叡山麓に住んでいたときの園名。醉操、操は曲の意、醉中に奏する曲。広陵調、琴曲に広陵散がある。山陽、晋の向秀の山陽聞笛の故事をふまえるか。

与徂徠、徳夫、子帥、蔚宗、燕飲東壁商山居、得山字 初稿三11 A

論集第十六号九十八頁参照。

東野遺稿中における猗蘭侯との唱酬の作

人日侍宴蘭台。分韻得高字示門下諸子。 卷上10 A

深識醉人日。不言似馬曹。平原飲仍旧。伝舎卧偏高。世事惟長缺。春風又濁醪。梁園饒酒伴。何更問蓬蒿。

一月七日、猗蘭侯の邸における詩宴に招かれて、詩韻を分つて「高」の字を得て作り、門下の諸子に示した詩。馬曹は晋の王徽之の別称、平原は平原督郵、悪酒をいう。長缺、斉の孟嘗君の食客が不満を抱いて国を去る故事、長缺帰去乎がある。梁園は漢代、梁の孝王の遊園。

豫州牧猗蘭侯辱以瑶韻見寄次韻奉謝 卷上13 B

独酌東山楓葉紅。蕭条伏枕白雲中。忽驚白壁槭辺笳。誰道朱絃世上空。桂樹三秋賦未繼。蘭台千載風能雄。鵷冠休怪時時側。最是王門禮酒濃。伊豫守である猗蘭侯が詩をつくって送られたのに対して、公の作に次韻して倡和の詩をつくって奉呈したもの。

席上奉賀豫州太守就国 卷上15 A

劍佩謁帰辞海東。賜衣朝出玉堂中。世家豈是會稽守。閔閔応為衛國公。遮路行逢鶴髮接。衝雲自有羊城崇。預知雨化共秋到。封

内民庶和氣融。

伊豫守の猗蘭侯が、西代の封地へ赴くときの祝賀送別の宴に侍って作った詩であろう。正徳元年のことである。

夏日滕侯席上分韻得「辺」字 卷上 16 B

楚台高倚鳳城辺。岳雪海雲相映懸。縱飲誰非河朔伴。倦游還似梁園年。樽前樹影侵華筆。簾外禽声入急絃。最是雄風総堪受。披襟各有快哉篇。

夏の日、猗蘭侯の宴席において詩韻を分ち「辺」の字を得てつくった詩。

七言絶句

三月既望猗蘭侯遊「青蘿之館」也。不佞与「潮和尚」從焉。而門下諸君子皆已斐然。分韻作詩。得「蘿」字。 卷上 19 A
貽蕩年年忙裏過。忽随「華蓋」問「青蘿」。共和雨色来「天目」。映度「芳蓀」如許多。

三月十六日、猗蘭侯が青蘿館、すなわち武井氏を訪れたとき、東野は大潮和尚と同道した。門下の諸君子もみなそろって出席していた。席上、詩韻を分って詩をつくり、東野は「蘿」字を得てこの詩をつくった。猗蘭台集初稿卷四に、武九江青蘿館記がある。武九江は鈴鹿市に後裔がおられる。(武井脩氏、最近物故された)。その家に猗蘭侯筆の青蘿館記一巻を伝存している。青蘿館は河陽の東にありとあるという。河内のことを河陽という(地名箋)。

車駕出獵。蘭台公子出守「馳道之門」不佞往侍。得「開」字。 卷上 19 B

城闕嵯峨馳道開。旌旗偏待「乘輿廻」。射鵬自有「侍臣獻」。不顧甘泉奏賦才。

將軍が出獵された。蘭台公子(猗蘭侯をいうか)が、お成りの道路の門の護衛にあたった。私もそれに侍って、詩韻を分って「開」の字を得てこの詩を作った。甘泉賦は漢の武帝の造った甘泉苑を歌った楊雄の作がある。

陪「猗蘭侯」遊「泰叡之後院」徠夫子及諸子皆從焉。分韻得「疑」字。 卷上 19 B

擬「將」流水「写」朱系上。携「得」竿簞「坐却疑」。登陟同窮千里目。歸時何処問「鍾期」。

猗蘭侯のお供をして泰叡山(地名箋に見える。メグロとある)の後院に行き、徠徠とその門下の諸子がみなこれに従った。詩韻を分って

本多猗蘭侯と南郭、東野

本多猗蘭侯と南郭、東野

「疑」の字を得てつくった詩。鍾期は、春秋楚の音楽家、鍾子期。伯才の琴をきいて、その心を悟った。子期の没後、伯才は絃を絶つてついにひくことはなかった。太宰春台の春台先生文集前篇卷二に春日奉陪西台侯遊泰叡山後院得山字と題する詩がある。おそらく同時の作であろう。

余咯血後。医沮令_レ廢_レ卷且不_レ出門。無聊不堪。懷_レ友生_二。則連喚_レ其名_一。和_レ黃鳥之囀_二者數聲_一。遂裁為_二三絶句_一。卷上、20 A

其一

城東野老咀_二金華_一。只樹_二猗蘭_一不_レ樹_二麻_一。夢斷春台孝先睡。崑崙山上月婆娑。

其二

城南郭靜大潮通。北溟長風伯錫雄。子帥命_レ舟誰不_レ命。掩_レ関作_レ史范蔚宗。

太宰純曰、第二第四句皆異、
声調、是為拗体、宗字出韻、

自分が咯血してから、医者から書物を読んだりすることをさしとめられ、外出することもできなかった。退屈でたまらないので、友人の名を想い出してはその名をよびつづけ、うぐいすのさえずりに唱和するようにして二絶句を作った。という。詩の句中に、友人の字号をよみこんでいる。東野（自分の名）、金華（平野）、猗蘭（本多公）、春台（太宰）、孝先（岡井仲錫）、崑崙（山井鼎）、南郭（服部）、大潮（元皓）、子帥（秋元以正）、伯錫（岡井）、蔚宗みな当時交遊のあった人たちである。

牛門宴_二猗蘭侯_一分_レ韻得_二誰字_一。余為_レ止_二酒詩_一不_レ成。而主人預有_レ句曰。羨看使君倒_二接離_一。余竊取_レ之。宋家有_二故事_一。主人応_レ不_レ

見_レ惜焉。卷上20 B

柳下且停金屈卮。梅花黃鳥欲_レ催_レ誰。笑吾猶似_二高陽伴_一。羨看夫君倒_二接離_一。

李白の襄陽曲に「山公酔酒時、酩酊高陽下、頭上白接離（白い頭巾）、倒着還騎馬」とある。晋書山簡伝に「時有童兒歌曰、山公出何許、往至高陽池、日夕倒載帰、酩酊無所知、時々能騎馬、倒著白接離、拳鞭向葛疆、何如并州兒」とある。牛門（おそらく徂徠の牛込の家であろうか）にて、猗蘭侯の主催の宴会があり、席上詩韻を分つて「誰」の字を得てつくった詩。そのとき東野は酒を止めていたので詩ができなかった。ところが主人にはあらかじめ句が用意してあった。それは「羨看使君倒接離」というのであった。私（東野）はひそかにこの句を取って詩をつくった。宋家に故事があるのであるから、主人は残念がられることはないであろう。酒を止めて酔うこともできないのにこ

んな句をつくるのを残念におもうこともあるまい、というのであろう。

中秋前二日。雨中。蘭台君侯訪_ニ牛門草堂_一。諸子皆集分韻太宰純曰此下
闕得某字三字 卷上 20 B

飛蓋参差風雨分。高陽樽酒客如_レ雲。桂花八月淮南色。欲_下把_ニ朱絃_一属_中使君_上。

中秋前二日、八月十三日の雨のふる中を、蘭台君侯（猗蘭侯）が牛門の草堂（牛込にある徂徠の家）を訪れた。諸子がみな集まって、分韻して詩をつくった。表題の注に太宰純が、この下に「得某字」三字を欠くと言っているから、春台も出席していたであろう。

陪_ニ滕侯_一遊_ニ護園_一得_ニ門字_一。 卷上 21 A

吾当朱絃意気存。狂生太守共_ニ芳樽_一。為_レ縁_ニ能起_ニ名山響_一。不似_ニ平生謝_ニ雁門_一。

猗蘭侯が徂徠の護園に遊びに出かけたのに従っていったときの作。分韻して「門」の字を得てつくっている。

歲暮集_ニ猗蘭台_一。徂徠不_レ至。得_ニ亭字_一。 卷上 22 A

誰能問_レ字詣_ニ文亭_一。雨雪君何忍_ニ独醒_一。今日平原似_ニ泉酒_一。不_レ知而鬢欲_ニ星星_一。

歳の暮、猗蘭侯の邸において集会があったとき、徂徠はやってこなかった。分韻して「亭」の字を得てつくった詩。平原は、平原君の故事、平原十日飲であらう。

猗蘭侯賜_ニ梅花一枝_一。上挂_ニ一詩_一。次_レ韻奉_レ謝。 卷上 22 B

江南春色夢中思。羌笛窗前風雨悲。弄罷但愁人不_レ解。縁_レ逢_ニ馭使_一許_レ君知。

猗蘭侯から、梅花一枝を賜った。枝の上に一詩が掛けられていた。よってその詩に次韻して、謝礼し奉った。このときの書牘がある。

豫州滕侯訪_ニ吾著園_一。席上分_レ韻得_ニ絃字_一。 卷上 22 B

莫_レ怪吾無_ニ桂樹篇_一。薰風正好被_ニ朱絃_一。明朝儻有_ニ羊裘問_一。但道使君看_レ竹旋。

伊豫守の滕侯（猗蘭侯）が私の著園（東野の家）を訪ねにきた。席上で詩韻を分って、「絃」の字を得てつくった作。

早春牛門小集奉_ニ滕豫侯韻_一 卷上 23 B

城西詩酒各科頭。睥睨相看奇思浮。知是雲章銀漢落。風前五色粲悠悠。

本多猗蘭侯と南郭、東野

本多猗蘭侯と南郭、東野

早春、牛込において（徂徠の家）小集があったとき、膝豫侯（猗蘭侯）の韻に次韻し奉った作。科頭は冠や頭巾などをつけていない頭。

餞_二膝豫侯_一席上得_二輕字_一
侯封有 天河 卷上 24 A

歴_レ天_レ河_レ弘_レ樹_レ生。離_レ堂_レ預_レ指_二錦帆輕_一。羨_レ君_レ更_レ挾_二秋雲色_一。拄_レ笏_レ高_レ吟_レ對_二葛城_一。

猗蘭侯が西代へ行くときの送別会のときの作。席上で分韻して「輕」字を得てつくった詩。

四懷

聞_レ道_レ天_レ河_レ接_二吹台_一。歸_レ時_レ爽_レ氣_レ為_レ君_レ來。遙_レ知_レ拄_レ笏_レ牀_レ頭_レ色。匣_レ裏_レ參_レ差_レ獨_レ自_レ開。

右懷_二猗蘭侯_一
侯封内有 天河原 卷上 26 A

四懷と題し、富春山人（田中省吾）猗蘭侯、大潮、元皓禪師、江若水（入江若水）の四人を懷うて作った詩の一首。

雪_レ後_レ蘭_レ台_レ陪_レ宴。不_レ佞_レ儻_レ有_レ事_レ後_レ至_レ焉。先_レ已_レ有_二大作_一。援_レ筆_レ奉_レ和。 卷上 26 B

平台雪後似_二春風_一。賢_レ主_レ嘉_レ賓_レ興_レ豈_レ空。後_レ至_レ如_レ逢_二待_レ臣_レ責_一。揮_レ毫_レ笑_レ指_二酒_レ盃_レ中。

雪のふったあとで、猗蘭侯の邸の宴集に陪席したが、自らはたまたま用事があって、後れて出席した。ところが先にもう詩が出来上っていたので、さっそく筆をとって唱和したという。

不_レ佞_レ置_二舍_レ田_レ間_一也。四_レ面_レ平_レ蕪_レ而_レ苦_レ無_レ山。則_レ画_二山_レ四_レ壁_一。日_レ把_二醪_レ其_レ間_一。為_二少_レ文_レ之_レ遊_一焉。蘭_レ台_レ公_レ子_レ聞_レ之_レ而_レ喜_レ焉。三_レ月_レ丁_レ丑。与_レ來_レ夫_レ子潮_レ尊_レ者_一。忽_レ披_二草_レ萊_一而_レ入。夫_レ此_レ三_レ人_レ者_レ也。各_レ有_レ所_レ挾_レ而_レ不_レ挾_レ也。煥_レ図_レ挾_二高_レ尚_一肩_二其_レ雲_レ関_一。無_レ乃_レ不_レ可_レ乎。授_二之_レ糸_レ桐_一。詩_レ以_レ為_レ從。

卷上 27 A

把_レ醪_レ日_レ卧_二名_レ山_一。五_レ馬_レ何_レ來_レ柳_レ色_レ間。床_レ上_レ糸_レ桐_レ已_レ無_レ恙。但_レ揮_レ壁_レ際_レ有_二雲_レ還_一。

私は田舎に家をもっている。家の四面はすべてひろびろとした畑で、山は一つも見えない。それで、四方の壁面に山を画いて、まい日、酒をくんでながめている。ちょうど、宗炳（少文）の卧遊のおもむきがあるようなものである。蘭台どの（猗蘭侯）はこれを聞いてたいそう気に入ったと見えて、三月丁丑 夫子（徂徠先生）と潮尊者（大潮元皓）とともに、とつぜん、草むらをわけて私の家へやってきた。この三人のものは、おのおの挾さむ（胸中に頼むところがあって誇っている）ところがあって、しかも挾まないのである。煥図（私）ひと

りが、高尚を挟んで、この雲閑を肩とませば（高くとまるのは）、よくないのではなからうか。そこで、これに糸桐（琴）を授けて、詩をこれにともなわせることとした、という。

新城源公子過「飲蘭台」。聞「樂談」詩。因賦奉「示」。卷上28A

意気元称公子翺。竭来欲問猗蘭篇。君看此曲人間少。揮罷雄風從「五絃」。

東野遺稿における猗蘭侯に与えた書牘

東野遺稿の中には、猗蘭侯にあてた書牘が収められている。左のとおりである。

- 1、奉復蘭台君侯　　疇昔之宴、管籥震天、琴瑟涌地、夢遊帝処、聴釣天之樂、亦何足比也。云々。
- 2、又、昨日市南失火、而賤族在近、匍匐往救、天幸獲免耳。云々。
- 3、又、上天欲使不佞又作伏枕之句乎。云々。
- 4、又、盛价載酒肉来、茲知墨水之興不在中秋也。
- 5、又、不佞詩債未償。夢寐呻吟之際。忽接一朵白雲飄然几案也。云々。
- 6、又、不佞環堵蕭然無復松菊之存。唯有捫梧而嘯耳。
- 7、又、昨辞台下後、稍看霏霏集衣者、比及半路雪片已如掌矣。

以上は、平生の往来の消息であり、公と東野との交遊がよくわかるものである。

その一通に、

私の住居はさびしいあばらやで、松菊なお存す（陶淵明の帰来辞のことば）というような趣もありません。ただ、梧おおぎりによりそうて嘯うそぶくばかりです。おもいがけなくもただ今は、春色の一枝（梅の花の一枝であろう）と玉稿をたまわりました（詩は前出）。さっそくその花を手にとり、その詩を口ずさんでたのしんでおります。門前の柳（陶の五柳にかけていう）も、人（私）を笑わないでしょう。敬しん

本多猗蘭侯と南郭、東野

本多猗蘭侯と南郭、東野

で御礼申し上げます。という。

又一通に、

昨日お邸を下りましてからのち、次第に雪が霏々として着物にふりつもって、家路のなかばになるころには、雪片が掌ほどに大きくなってきました。昔の郊溪の帰棹（晋代の人の雪見の故事）もこのように冷たくはなかったでしょう。今また、お手紙に接し、あわせて白雪の賜りもの（楽府などの詩のたまりもの）を辱くいたしまして、ありがたく存じます。ちょうど俗用が一ぱいもっていまして御礼にも参上できせん。日を改めてお伺いしたいと思います。という。

安藤東野伝記資料

安藤東野の伝記資料としては、福寿院にある東野先生碣、服部南郭撰文のものが第一にあげられる。南郭先生文集初編卷八にも収められている。もう一つ南郭には祭滕東壁文があり、これも同じく南郭先生文集初編卷八に収められている。本多猗蘭侯には、猗蘭台集初稿卷四に東壁文集序と滕東壁誄とがある。東壁文集序は、東野の文集のために撰じたものであろうが、別に東野先生集序（荻生家）があることは論集第十六号一一八頁に紹介したとおりで、これはまた別の一文である。東野の文集は、はじめ猗蘭侯が刊行する予定であったが、公が官務多忙のため原稿がはかどらず、結局、没後二十年のちに成った。東野遺稿三巻というのが現存するものであることはさきの号に記しておいたとおりである。公の東野文集の序が二通もあることは、あらかじめ序文を書いておいて刊行する予定があったに相違ない。ただ、延引二十年に及んで、さていよいよ刊行のはこびになり、ここでは猗蘭侯の序文は採用されなまま刊行されて、掲載されずに了ってしまった。今見る東野遺稿には太宰春台と秋元子帥と山県周南の序文があるだけで、春台の序にはこの本の刊行の後れた経過をくわしく記している。しかし猗蘭侯の序文がはぶかれているのは、やや不思議な感じである。東野の墓誌銘は、秋元澹園の撰した文があり、先哲像伝巻四に、全文が掲載されている。澹園は東野と同郷下野の生れであるがために、墓誌銘をかいたといっている。

哭詩のたぐいには、南郭に哭滕東壁詩十首、鷹見爽鳩に哭東野処士詩三首があり、山県周南にも哭東野詩があるなどかなりの作がある。東野

が才能人物ともに多くの人々の信頼と尊敬を受けていたことがわかる。猗蘭侯の復琴鶴書牘に東野が春に吐血し四月に疾あつく十三日に起たず、かれの学業の巍々乎たるは実に牛門の侯芭（漢の楊雄の門人、雄が卒して心喪三年）ともいふべき人物。他にも人はいるがかれが最も秀でている。物徠徠が歎惜されたことは孔子が顔淵を失ったようなものである。私（忠統）も東野と交ること十年、往事を追想して涙を流すという。十年といえは徠徠の護国塾を開いてから以来の交際ということになる。

先哲像伝巻四に記す逸話を拾うと、

東野は文芸の暇に、音律を学び、よく笛を吹きたりとぞ、又、此肖像を見るに、容白清らかに、鬚もなく、ほとんど美少年に類せり。尤も鬚なきをば徠徠の猗蘭侯に呈する書中に「且之子無鬚、豈容俾字有鬚乎」の語あり、証とすべし。

東野遺稿三巻あり。是は徠徠その名の終に朽ちんを恐れて、二三子に命じて四方に散佚せるを集録せる者なり。没後廿年にて始めて成れりとなん。

東野は子なし。死後、同盟の人々、合贊して墓石を営みしなり。墓石に其よしを記す。誠に才学名に越え徠徠称して之に遜するに年を以つてすれば豈に不佞の能く及ぶところならんや、と云われしほどにて、生涯貧にてありしは、護園徒中の不遇なる人物、惜しむべし、とある。

護園雑話（服部氏藏本、渡辺刀水著本多猗蘭侯に引用）に、東野が白山に隠栖していたころ、愛妓をつれて同居していた。たまたま徠徠が訪問したので東野が狼狽して物置にその妓を忍ばせたが、その妓の上衣が屏風にかけてあったのに気付かず、徠徠に問われたが即刻に小生の妹のものといつてその場を逃れたという逸話がある。

東野の伝記は以上のほか、先哲叢談、近世叢語、同統、事実文編、先哲像伝、諸家人物誌等に見える。

東野は、閑散餘録によると、護園門下では平野金華、守屋煥明らとともに書をよくしたので知られたという。東野の書は儒林墨宝の中に刻されている。猗蘭台集には、祝允明草書跋があり、その中に東野の双鈎した祝枝山草書のことが見え、あわせて猗蘭侯が東野の人物を愛していられたことが記されている。

安藤東野墓誌銘 秋元澹園撰

先生姓藤。諱煥図。字東壁。其先瀧田氏。為_ニ奈須著族_一。父玄佐君。贅而冒_ニ大沼氏_一。以_レ医仕_ニ黒羽侯_一。先生。以_ニ天和癸亥正月廿八日_一。本多猗蘭侯と南郭、東野

本多猗蘭侯と南郭、東野

生東野州。故學者稱之云爾。幼孤養於安藤氏。遂籍東都。冒其姓。後見物夫子。更業儒。猶不忍復初。曰。猶之藤氏也。宝永中仕甲侯。進講經憲廟于邸之宴。正德元年病免家居。猶且甲之廩致粟如仕時。辭則又值西台侯喜士也。廩乃繼自西台。初家叡麓著園。後移商丘。罹災寓西台邸以卒。享保己亥四月十三日也。葬淺茅原。春秋三十有七。無子。初遊物夫子之門者。殆盡海內之俊矣。而莫不推先生具體焉。語具諸君碑伝集序中。以不佞以正（秋元の名）生同郷。辱命志銘。銘曰。盜勿発兮先生之藏無金。牛羊勿踐兮先生雖無後矣。悲夫友友之心。

東壁文集序 本多忠統撰

東壁蓋嘗謂。吾輩以狂簡而傲矣。雖則褐衣糲食。落魄於陋巷。而立言千古。藏之名山。伝之通邑大都。以齒古人也。奚有意曲吾所學。麗於世而阿乎一時貴盛乎。無知則已矣。東壁素貧而居。恒陶陶乎而樂矣。即所著述。短章大篇。其於体裁。文不出漢魏。詩不下開元天宝。無慮諸名家所為。未嘗不潛積一握中。而睹其志之所發。率在不遇耳。夫貧而樂者。不憂去就。不勞進退。在邦無怨。在鄉無辱。陶陶乎。閑閑乎。若大藪中。何為可有遇之感乎。何乎。方今文化隆盛。經生師儒。皆進而東。翱翔藝苑。蟬嫣翰林。振振然游于王公大人之門。蓋槩取道濂洛。動言性理。其所教授。不過稱謂。嚴然修身。而及家及國。黽勉小心。以去旧染。使之重習。治浹以成性。詞章無益。唯理是求。既已盈耳属心。編陋成風。是以王公大人。待士儼無偷色。貴我賤彼。而彼固且巧言當理。雖則罷驚見稱。道在茲。而命千里之譽。則足矣。當其質問經義。自設一儀式。画屏隔座。席重瑤蘭。身踞肆錦。帳中不見其面。而執法在前。御史在後。視日蚤莫。則曰畢。心志不倦。則曰講。殆失師位。不異下僚。是皆為仕祿阿而說聖人之道。鄙俚之弁。猥事易曉。而大失其真。豈謂言道乎。將謂學道乎。蓋詩則通人情。文則達古言。去古雖遠。以此察之。遂知先王孔子之道所以治天下。今則枘鑿不相。入則吾輩所困也。如東壁愈益不懼貴盛。不失師位。拳世為奇異。怪之疑之。是以操觚染翰。発其志。若是豈不然乎。乃折乎青雲之志。寂寞以養志耳。東壁向遷居商山。以環堵蕭然。俗客不至。自甘焉。詩書縱橫。濁酒一杯。唯日不足。自謂若蟬蛻於塵垢。為方外之游。意愈深巖穴云。亡何羅災。文稿及家財尽矣。東壁自若。謂余曰。秦焚書而天下尽矣。然猶有餘燼而伝是之。亡世之人所作也。東壁今在。何害不朽。余以社中誼。從游久矣。乃令舍余日夜愈相親。愈披腹心相示。常相謂。吾輩何其不為乎難哉。生百世之下。遇百世之上。寧亦憂一時。不知我

所願。死_レ不_レ朽。死_レ不_レ朽。雖則千百年可_レ知也。亦俟_ニ一時之遇於千載_一也。已亡何卒矣。乃求_レ舍無_ニ一長物_一。封禪亦空。噫亦何取乎。其不_ニ管嘆_ニ一時不遇_一而已。千載之遇。亦殆若_レ有_レ不_レ可_レ得。於是為_レ之徧_ニ索四方_一。猶是天之不_レ喪_ニ斯文_一。幸存_ニ什一於阡陌_一。蓋數_ニ年于茲_一。今也。梓成。遂取_ニ其餘燼_一。藏_ニ之名山_一。伝_ニ之通邑大都_一。令_レ齒_ニ古人_一。則推_ニ東壁之志_一。雖_レ曰_レ得_ニ千載之遇_一可也。余於_ニ東壁_一雖_レ薄哉。孰_下与於向令_ニ驚命_ニ千里_一者乎。作_レ序以述_下其所_ニ相謂_一志_上云。

東野先生碣

福寿院は東京都台東区橋場一丁目十六ノ二にあり、曹洞宗の寺院である。山号を無量山と称する。天正元年の創建、長島宗三郎が開基で、広巖嶺寛（曹洞宗全集参照）が初代開山である。現住職は野口弘龍師といい、浅草仏教会の主事をしておられる。寺は再度災害にあい、昔時の遺構はない。安藤東野の墓は都の旧跡として史蹟の指定になっている。

安藤東野の墓は、福寿院の門を出て、やや右に行った街角の小さな区画をした中にある。高さは一米半位で、碑の形ではなく碣の形をと、円い台石の上に、墓標を立てているが、それも自然石風の石の前、左右に面をとって、正面は輪郭を設け、上部に、篆書にて「東野先生碣」の五字を横書きに刻している。碑文は、正面からはじまり、向って左側と、向って右側とで、全文が刻されている。正面は八行、行十八字、左側は八行、行二十字、右側は七行二十字、（本文は銘にて改行し、六行となり、撰者名一行を加えて七行となるであろう。書者の名があればもう一行はいるがないようである）正面の第一行のはじめ十四字は残欠している。左側は末二行に欠損があり、右側の七行はほとんど大半が残欠し、わずかに第二行末の「公誌」、三行末の「不佞」（不字は漫滅）が残存し、末行の下部に「元喬」二字を存している。碣の全文は南郭集初編巻八に収められているが、正面第三行のはじめの四字は、文集では「意而師悖」に作っているが、碣では「意而悖師」となっていて、碣の方は「師に悖る」とよむことができ文意が通じ、文集の方では文意は通じにくい。これは碣の方が正しいとしなければならぬ。また、正面第五行の「為字精敏」の上に「少」字が文集にはあるが、碣ではこの字はない。また、正面第七行の「遂諸侯」の遂字の下に、文集では「游」字があるが、碣ではこれを欠いている。この「少」「游」二字はある方がよいが、刻するときに文字を

本多猗蘭侯と南郭、東野

脱落したらしく思われる。右側は渤損が甚しいので、止むをえないが、左側は文集に照してほぼ誤りはないようである。碣の「年老」は文集に「年先」に作る。年老の方がよい。右側の第六行の末尾は他の墓碑の例から考えると「友人平安服元喬撰」とあり、元喬二字だけが残存したことになるが、「撰」字はないようである。書者は、文字から見て南郭が稿を書丹しているようで、松下烏石の字のようではない。碣の形は、円石の上に面取りをした墓碑が立っていて、文雅で自然すがたが好ましく思われる。これに似た形式のものに高芙蓉の墓碑があり、現在東京都内にある。なお、碣の背面に刻字が見られるが大半残欠している。現状は左のとおりである。

□□院境内

加フルニ区劃整□□依リ今ノ地□移

想像シ茲ニ改□□リ

右の程度しか読むことができない。おそらく福寿院の境内にあったのを、区画整理のため現在の位置に移したことを述べているようである。従って移転後に刻したものである。このことは住職も同様に言っていた。墓碑の积文は左のとおりである。

東野先生碣 服部南郭撰 初編八18B

（初但徠物先生以ニ今業ニ創ニ起東都ニ也。）人或猥以

不レ誦。未ニ之能レ信。其為ニ名高ニ来見者。往々不レ達ニ其

意ニ而悖レ師。物先生乃謝曰。即屢滿ニ戶外ニ何益也。

蓋數年而有ニ膝東壁ニ。東壁下野人ニ。諱煥。東壁

字。号ニ東野先生ニ。為レ学精緻。有ニ大志ニ。既冠乃歎曰。

丈夫生逢ニ升平ニ。可ニ復為ニ介子博望ニ乎。詩書雖レ欠。

然庶幾哉。幸而不レ朽。雖ニ筆研ニ足矣。遂諸侯不レ遇

而会ニ物先生為レ社。及ニ来見ニ。則大誦ニ古文ニ。文益進。」「

物先生亦叩ニ両端ニ而厭ニ其意ニ。称レ若レ得一敵国ニ。時唯有ニ

周南鼎生。相与切劘。而復古之學。隆々日起矣。亡何
今諸公及元喬。聞物先生善養才。盍往歸之。至則東
壁既已入室。雖諸公哉。每稱說不啻辟三舍。而東壁
亦謙虛以先之。由是文學之士。彬々日益衆云。東壁

嘗謂余曰。吾事物先生。豈為耆艾年老而然哉。顧千

（百年復見斯文東）方者。非今日而何。今世多稱物先

（生収才。諸公亦由此益与）起者。蓋以東壁為稱首也。上

（東壁善音律。工書。又通象胥家言。凡所學莫不兼究。

屢窮困而待親戚。多可稱行。其狀并所系。諸公誌

（伝具是矣。享保己亥年三十七卒。悲夫。夫喬也）不佞。

（昔生則各言爾志。今乃銘之。亦惟執友之義云爾。如

其不朽有遺文矣。是則東壁哉。銘曰。

維時文籍。貽之下民。胡而忽兮。庶幾列星哉神也。）

元喬

東野先生碣

初め徂徠物先生、今の業を以て東都に創起するや、人、或いは猥に誦せざるを以て未だ之れ信ずること能わず。其の名高きが為めに
来り見ゆるもの、往々にして其の意に達せずして師に悖る。物先生すなわち謝して曰く、たとい屢、戸外に満つるも何の益ぞや、と。蓋し、
数年にして膝東壁あり。東壁は下野の人。諱は煥図。東壁は字なり。東野先生と号す。（少くして）学を為むること精敏、大志あり。既に
して冠して乃ち歎じて曰く、丈夫生れて升平に逢い、復・介子博望を為すべけんや。詩書、欠けたりと雖も、然れども庶哉すべきかな。幸
いにして朽ちずんば、筆研と雖も足りぬと。遂に諸侯に（遊び）、遇せられず。而して物先生の社を為すに会ひぬ。来り見ゆるに及んで、

本多猪蘭侯と南郭、東野

本多騎蘭侯と南郭、東野

則ち大いに古文を誦し、文益々進む。物先生もまた両端を叩いて（論語子罕）其の意を厭かしむ。一敵国を得たるが若しと称す。時に、唯だ周南県生（山県周南）有るのみ。相ともに切劘す（きりけづる、切磋琢磨）。而して復古の学、隆々として日々に起る。何も無くして、今の諸公及び元喬（南郭の名）、物先生善く才を養うと聞く。盍ぞ往て之に帰せざらんやと云う。至れば則ち東壁すでに室に入り、諸公と雖も、称説するごとに、啻に三舎を辟くるのみならず。而して東壁もまた謙盅（謙虚）、以って先んず。是に由って文学の士、彬々として日に益々衆しと云う。東壁、嘗て余に謂いて曰く、吾、物先生に事う、豈に耆艾年老なるが為めにして然らんや。願うに千百年、復、斯文を東方に見るもの、今日に非ずして何ぞやと。今世、多く物先生の才を収むるを称し、諸公もまた此に由って益々興起するもの、蓋し東壁、称首為るを以ってなり。東壁、音律に善し。書に工みなり。又、衆胥家（通訳官）の言に通ず。凡そ学ぶところ兼究せざるなし。屢々窮困す。而して其の親戚を待する、称すべき行多し。其の状、系するところを并せて、諸公の誌伝、是を具す。享保己亥年三十七卒す。悲しいかな。夫れ喬や不佞、昔、生るとき、則ち各々爾の志を言う。（論語「盍言爾志なんぞ汝の志を言わざる」。忠統公が將軍の御小姓を勧めていた時、將軍綱吉が諸臣に各々爾の志を言えといわれて、忠統が今の盛大な文物を古文辞によって後世にとどめたいといったことがその書堂記に見える。）今、乃ち之に銘するもまた、惟執友の義と云うのみ。その不朽（文章は経国大業、不朽盛事）の如きは、遺文あり。是れ即ち東壁なるかな。銘に曰く、維時、文籍、之を下民に貽す。胡すれぞ忽たる。庶幾は列星なるかな（韓非子解老、列星得之、以端其行、模範となる人物）、神や。

この文を読むと、はじめ徂徠が護園塾を開くのは宝永六年のころで、このころすでに東野は徂徠の門に入っていた。そのころ東野のほかには山県周南ぐらいがいるだけであまりはやらなかった。そののち次第に門人が多くなった、それには東野が主導者となって護園に多くの人を引き入れたことが与って力となっている。騎蘭侯もかなり早く宝永六年のころから東野と交っている。このことは尺牘の資料に十年間東野と交わっていると言っているのによってもわかる。

膝東壁誄 本多忠統撰 初稿四 22 A

享保四年夏四月乙卯。東野先生。以疾卒于吾邸。春秋三十七矣。先生名煥図。東壁其字。自少好學。邁心玄曠。弱冠仕宦。捐榮而隱。始在「東山」。後在「商山」。玄亭寂寞。高名特達。廼遭焚巢。繫我是依。忽承「帝召」。游「彼雲鄉」。把「臂晤言」。遂成「邈焉」。七子雖「呢」。唯吾

与_レ子。乃作_二誄辞_一。表_二之素旗_一。其辞曰。

夫子建_レ業。高矣美矣。開_レ国未_レ聞。穹隆颺起。六藝百氏。決鬱渺瀾。世微_二君子_一。斯焉取_レ斯。躬抱_二貧病_一。独守_二明真_一。誄_二茅郊垌_一。蓬蒿絕_レ人。璿玉含_レ光。椒桂辞_二春。貞操孤芳。蟬_二蛻塋塵_一。惟七子者。纒聯_二傍徨_一。名山在_レ壁。五絃在_レ牀。追爾吹_レ笛。餘音遠_レ梁。散如_二飛鴻_一。淫衍淋浪。美哉酒德。孰及_二爾狂_一。嗚呼夫子。卓犖英才。清思芬藻。高標崔嵬。飛泉沸涌。春華煌開。宴會虛_レ左。授簡誰裁。亭亭峻挺。岩岩特鮮。詠_二之金声_一。采_二之瑚璉_一。今世學士。斐譚不_レ弁。漢魏文辞。千載宛轉。嗚呼夫子。晋後唯類。義猷具_レ体。縱橫隨_レ意。鳳鸞騫舞。蛇竜蟠_レ地。其如_二側目_一。況亦明智。木有_二枝葉_一。青陽將_レ至。時乎日月。猶有_レ食_レ之。昊天不_レ弔。吾涕漣洏。嗚呼哀哉。梁木正壞。慘慄何期。非_レ子為_レ慟。吾慟為_レ誰。思在_二東山_一。張_レ樂而游_一。廻復載酒。于_二彼商丘_一。翰墨若_レ新。声響如_レ流。嗒焉今亡。從_レ之末_レ由。相逢之喜。忽為_二斯憂_一。天也亡_レ我。我憾悠悠。嗚呼哀哉。子之吾依。吾唯子俱。一室双榻。双爵一壺。酣則映_レ顔。歌則聯_レ響。此樂千秋。棄_レ我何往。縹緲不_レ還。鶯鶯以_レ嗟。歸鳥失_レ林。游魚離_レ波。痛矣滕子。秀而不_レ実。覲爾遺言。輯爾散_レ帙。大業中途。顔冉孰_レ匹。人去物存。甘棠蕭瑟。撫_レ之以思。雨泣其_レ溢。嗚呼哀哉。

滕東壁誄 本多忠統撰

享保四年夏四月乙卯。東野先生、疾を以て吾邸に卒す。春秋三十七なり。先生、名は煥図、東壁はその字。少より学を好み、心を邁すること玄曠（陸機の詩句）。弱冠にして宦に仕う。榮を捐てて隠る。始め東山（上野）に在り、後、商山（白山）に在り。玄亭、寂寞たり。高名、特達す。廻_レち焚巢（火災）に遭い、緊我に是れ依る。忽ち帝の召を承け、彼の雲郷に遊ぶ。臂を把り語言する、遂に邈と成る。七子、昵なりと雖も、唯、吾と子とのみ。乃ち誄辞を作り、之を素旗に表す。其の辞に曰く、

夫子、業を建つ、高し、美し。国を開きしより未だ聞かず、穹隆として颺起するを。六藝百氏、決鬱として渺瀾たり。世に君子なかりせば、斯_レち焉ぞ斯を取らん。躬_レら貧病を抱き、独り明真を守る。茅を郊垌（郊外）に誄_レり、蓬蒿（雑草の中にすみ）、人を絶す（人との交りを絶つ）。璿玉、光を含み、椒桂（賢人に喩える）、春を辞す。貞操、孤り芳しく、塋塵を蟬脱す。惟、七子なるもの、纒聯（連なるさま）、傍徨す。名山、壁に在り（壁面に山水を描いた）、五絃、牀に在り。追爾（顔色のやわらぎのでるさま）として笛を吹き、餘音、梁を繞る。散ずること飛鴻の如く、淫衍、淋浪たり。美なるかな酒德、孰_レか爾の狂に及ばん。嗚呼夫子、卓犖たる英才、清思芬藻。

本多猶蘭侯と南郭、東野

本多猗蘭侯と南郭、東野

高標して崔嵬たり。飛泉沸涌し、春華、煌として開く。宴会、左を虚しうし（上席をあけて礼遇すること）、授簡、誰か裁せん。亭々として峻挺し、岩々として特鮮たり。之を金声に詠じ、之を瑚璉に采る（宗廟の礼器、人材に喩える）。今世の学士、斐韡（美しく光明あるさま、声楽の盛んなさま）、弁ぜず。漢魏の文辞、千載に宛転たり。嗚呼夫子、晋後、唯類す。義猷（王羲之と王猷之）体を具え、縦横、意に随う。鳳鸞、竊舞し、蛇竜、地に蟠す。其れ、側目するが如し（以上書をよくしたこと）。況んや亦、明智をや。木に枝葉あり、青陽、將に至らんとす。時に月日すら、猶お之を食する有り。昊天、弔まらず、吾涕、漣洏たり。嗚呼、哀しい哉。梁木、正に壊れ、慘慄、何ぞ期せん。子に非ずして慟を為さんや、吾、慟する誰が為めにする。思は東山、衆を張りて遊ぶにあり。廼ち復た載酒する、彼の商丘に于てす。翰墨、新なるが若く、声響、流るるが如し。嗒焉として今は亡し、之に従うに由なし。相逢の喜び、忽ち斯の憂と為る。天や我を亡す、我が憾悠々たり。嗚呼、哀しい哉。子の吾に依る、吾、唯だ子と俱にす。一室双榻、双爵一壺。酣なれば則ち顔に映じ、歌えば則ち響きを聯ぬ。此の衆、千秋、我を棄てて何ぞ往く。縹緲として還らず、禬々として以て嗟く。帰鳥、林を失し、游魚、波を離る。痛ましや滕子、秀にして実らず（穂は出たが実らないこと、論語のことば）。覲爾（目のあたり）として言を遺す、輯爾として帙を散ず。大業中途、顔冉（孔子の門人顔淵と冉伯牛、ともに徳行をもって聞えた）孰か匹せん。人去って物存す、甘棠（善治者を思慕する情をふくむ）、蕭瑟たり。之を撫して以て思う、雨のごとく泣、其れ溢る。嗚呼、哀しい哉。

東野は天和三年（一六八三）正月二十八日、下野黒羽に生れた。享保四年四月十三日に猗蘭侯の邸において没した。年は三十七歳であった。先生は名は煥図といい、東壁はそのあざなである。東野と号したのはその郷里によっている。若いころから学問がすぎで、深い思想に心をひそめていた。弱冠（二十歳）にして仕官した。甲斐侯柳沢吉保に仕えた。これは宝永年間であるという。そのち正徳元年（一七一一）病氣のため職を辞して家居することとなる。衆をすてて隠るというのはこのころのことである。はじめ上野の（東叡山麓）東山に住み、のち駒込の商山に住んだ。商山は白山ともいう。白山は地名箋にも商丘、商山、商阜の名で見えている。みなハクサンと訓している。今の駒込（こまごめ）にあたる。ここで火災に逢って家を焼かれている。廼ち焚巢に遭うというのはそのことであろう。晩年、病がたかまり、本多猗蘭侯の邸に賓師として住み、この邸で卒した。ここにも、疾を以て吾邸に卒すとあるとおりである。忽ち帝の召きを承け以下は、天帝に召されてあの世にゆき、もはや手をとって語りあうこともすっかりなくなってしまった。猗蘭侯をめぐる人たち、詩文のなかまが七子あったが、その中でももっとも親

しかったのは、私と君とだけであるという。誄の辞にも「一室双榻、双爵一壺」(一室に二つの椅子、二つの杯に一つの徳利)といっているように、猗蘭侯とはよほど親密であったことがよくわかる。七子は、東野のほかに、服部南郭、平野金華、守屋煥明、太宰春台、越智雲夢が近い関係の人たちで、山県周南も数に入るかもしれない。ほぼこの七人がたえず詩会に出席していたようである。明の古文辞派の七子にならってこの称を用いているのであろう。この誄の辞は、古文辞に倣ってつくられたもので、その哀しみを訴えた、情味のあるばかりの名文である。

祭_ニ膝東壁_ニ文 服部南郭撰 初稿八22 B

維享保四年六月壬寅朔。六日丁未。友人服元喬。謹以_ニ清酌之奠_ニ。敬告_ニ故処士東野先生之靈_ニ。曰。嗚呼哀哉。夫何一哲人兮。離_ニ妻絶之多_ニ。隱。祝_ニ犁配_ニ于淵猷_ニ兮。惟甲寅君以殞。伊予欷而号泣兮。執_ニ疇昔之友誼_ニ。論_ニ香蘭之結言_ニ兮。何緯繡以忽棄。悵_ニ皇天_ニ而嘿嘿兮。心惚恍以流_ニ淚。誠覽_ニ君初_ニ而悲_ニ君心_ニ兮。屯遭抑厭身亦屈天。志縱_ニ八紘_ニ乞以怡儼兮。風雲數濯遭_ニ此不造_ニ。父兮溘以朝逝兮。母兮奄其夕死。哀_ニ天只之积_ニ女兮。孤坎壈以改_ニ恃。佗人勵以易_ニ怒兮。吾忖_ニ心齊_ニ夫奴婢_ニ。遇_ニ帝乙之筮吉_ニ兮。婦_ニ良袂之妹氏_ニ。固顧_ニ室而懸馨兮。并_ニ朝餐_ニ而當_ニ訾。伯猶待_ニ儲夫厥家_ニ兮。君顛顛以禦_ニ侮。紛族人之警誓兮。何独君而靡_ニ倚。既字招其応_ニ荝兮。聊報_ニ志乎懸弧_ニ。遵_ニ書圃_ニ而翱翔兮。察_ニ章画於前圖_ニ。逢_ニ耆徳於泮宮_ニ兮。陳_ニ蓄思_ニ而見_ニ孚。曰来予語_ニ女。逸矣稽古。世莫_ニ之能知_ニ。顧_ニ前脩_ニ其為_ニ理兮。傷_ニ微言之磷緇_ニ。聿末俗之溷濁兮。競_ニ時容_ニ以並馳。固衆口之贅疣兮。何慚_ニ鮐而離跂。彥紛紛而節解兮。聖謨備以愈離。謂_ニ蕙蘭_ニ以為_ニ臭兮。噉_ニ芳言_ニ而屬_ニ辭。藐_ニ誥盤_ニ而恬_ニ筆兮。退顧_ニ難而相疑。豈魚目之足_ニ貴兮。燕石碌以充_ニ幃。吾觀_ニ太上之道紀_ニ兮。聊揚_ニ志乎所_ニ歸。羌夫君之昭質兮。忽遵_ニ路而改求。竭_ニ颺颺而劉覽兮。汨滅轂以上游。拜_ニ重華於二典_ニ兮。仰_ニ夏后於九州_ニ。雅頌洋其盈_ニ耳兮。洞_ニ太易_ニ而達幽。服_ニ素王之玄訓_ニ兮。感_ニ穫麟之所_ニ由。吁鳳鳥之不_ニ至兮。頼_ニ六籍之有_ニ脩。右_ニ游夏_ニ而左_ニ左兮。掣_ニ伯陽与_ニ莊周_ニ。從_ニ靈均_ニ以攬_ニ祛兮。鳴_ニ瓊佩_ニ而周流。衆衝蓰以来御兮。紛飢麗以尚羊。羌結撰之至思兮。綴_ニ纂組之琦瑣_ニ。解_ニ連環之詰屈_ニ兮。碎_ニ琅玕_ニ而為_ニ粃。屑_ニ珠蕊_ニ而咀_ニ嚙兮。勻_ニ瑤漿_ニ以美_ニ觴。口氤氲其玉振兮。爛_ニ幃帷而吐_ニ光。君独窮_ニ年其將飽兮。何司命之不_ニ常。決_ニ通塞於靈氛_ニ兮。訊_ニ幽人之貞吉_ニ。蹇遑遑而中辭兮。竭_ニ解_ニ珮而棲逸。顧_ニ商丘之巖巖_ニ兮。拾_ニ玉芝乎旭日_ニ。操_ニ蓬桑_ニ以為_ニ杓兮。築_ニ環堵之一室_ニ。衣_ニ薜荔_ニ而行歌兮。沐_ニ蘭湯_ニ以馥_ニ秘。芬濯_ニ髮而朝夕兮。漸_ニ致_ニ脩名之茂实_ニ。忽違棄而永逝兮。鎖_ニ閭闔_ニ而深匿。尋_ニ帝郷_ニ不_ニ可_ニ窺兮。沕昧昧其無_ニ極。已矣矣不_ニ歸哉。吾將_ニ侑_ニ羞而墜_ニ淚沛兮。陰雲曖曖而心益_ニ盡。神兮安在。尚饗。

本多猗蘭侯と南郭、東野

祭_ニ滕東壁_ニ文 南郭先生文集初編卷之八 22 B

維、享保四年六月壬寅朔、六日丁未。友人服元喬、謹しんで清酌の奠を以って、敬しんで故処士東野先生の靈に告げて曰く。嗚呼、哀しい哉。夫れ何ぞ一哲人、萎絶の隠に多きに離れり。祝犁（巳）、淵猷（亥）に配す、惟甲寅に君以って殞す（没す）。伊予、欽（なげく）として号泣し、疇昔の友誼を執る。香蘭の結言を誦るに、何ぞ緯繡（そむくこと、楚辭離騷）として以って忽ち棄つ。皇天に悵として、嘿々（だまっている）たり、心、惓惓（うっとり）として以って涙を流す。誠に君が初を覽て、君が心を悲しむ、屯遭（行きなやむ）抑厭（おさえつける）して、身も亦屈天（わかじに）す（司馬相如伝の言葉）。志、八紘（天下）に縦にして、乞として以って怡凝（いぎ）す（司馬相如伝の言葉）。風雲数々（しばしば）濯れて（くじけること）此の不造（不幸、詩経）に遭へり。父、湓として（忽ち）以って朝に逝く、母、奄として（にわか）に死す。天只の女を釈るを哀しむ、孤にして、坎壈（不運）にして以って侍を改む。佗人は砌として以って怒りを易え、吾、心を付りて夫の奴婢に齊くす。帝乙の筮、吉なるに遇い、良袂の妹氏を帰がしむ。固より室を顧るに、懸磬（貧乏で室に一物もないこと）、朝餐を并せて、而して訾に当つ。伯猶、儲を夫の厥の家待つ、君、顛頤（食物が取れないで顔色が黄色になる）して以って侮りを禦ぐ。紛たる族人の警警（口をそろえてのしる）たる、何ぞ独り君にして倚ること靡き。既に、字もて招かれて其れ旂（旂、旗）に応ず、聊か志を懸弧（男子の誕生）に報ず。書圃に遵って翱翔する、章画を前図に察す。耆徳に泮宮に（諸侯の国学）逢い、蓄思を陳べて孚とせらる。曰く、来れ、予、女に語げん、邈たる稽古、世これを能く知ることなしと。前脩を顧うて其れ理ることを為し、微言の磷緇（すりへらされてうすくなる）を傷む。聿に末俗の溷濁（にごる）なる、時容を競うて以って並び馳す。固より衆口の贅尤（耽、こぶといぼ、無用のもの）なる、何ぞ慚慚にして離跂たる（淮南子俶真訓の語、慚は忘れる、跂は後こみち、こみちを忘れ跂を離れる）。疹（つかれるさま）として紛々として節解（草木の枝葉の散落すること）し、聖謨、偏（落ちぶれること）として以って愈々離る。蕙蘭を謂いて以って臭と為し、莠言（悪いことば）を嚙うて（食うこと）辞を属す。誥盤に藐して筆を咥り、退いて難を顧みて、相疑う。豈に魚目（珠に似て非なるもの）の貴ぶに足らんや、燕石（燕山から出る玉に似て非なるもの）碌として（石の多いさま）以って幃に充つ。吾、太上の道紀を覩て、聊か志を帰するところに揚ぐと。羌夫君の昭質なる、忽ち路に遵って改め求む。塙として鼉鼉として劉覽し（あまねくみる）、汨滅（疾いさま）轂として（かるくあがるさま）上游す。重華（舜帝）を二典（尚書の堯典と舜典）に拝し、

夏后（禹王）を九州に仰ぐ。雅頌、洋として其れ耳に盈つ、太易（宇宙の生成以前をいう、未だ気のあらわれぬとき）に洞にして幽に達す。素王（孔子）の玄訓に服し、獲麟の由（魯哀公十四年西狩して麟を得た孔子がこれにより春秋に着手した）る所を感ず。吁、鳳鳥の至らざる（世に聖主の出ないこと論語子罕）、六籍（易、書、詩、礼、楽、春秋の六経）の脩することあるを頼いとす。游夏（子游と子夏、孔子の弟子）を右にし、左（左丘明）を左にす、伯陽（老子のあざな）と莊周とを挈つらう（とらえる）。靈均（屈原のあざな）に従って以って袿を攪り（袖をとる）、瓊佩（礼服につけるおびだま）を鳴らして周流す。衆衝（衝は敵軍に向う兵車）、菴（相入るさま）として以って来り御う、紛として飢麗（左右相隨う）として以って尚羊す（さまよう）。羌結撰の至思なる（結撰は文章を作ること楚辭に結撰至思の語あり）、纂組（くみひも）の琦璜を綴れり。連環の詰屈（かがまつのびないこと）たるを解き、琅玕を碎きて粳（食米かて）と為す。珠蕊を屑（けつ）って咀嚙（そく）し（かみこなす）、瑤漿を勻（とこのえ）て以って觴に実つ。口氤氲（気の盛んなさま）、其れ玉のごとく振う、爛として皤皤（ひかりかがやく）として光を吐く。君独り年を窮めて其れ將に飽かんとす、何ぞ司命の常ならざる。通塞を靈氣に決して幽人の貞吉を訊う。蹇（なやむ）として遑々として（あわただしく）中ごろ辞す、竭（去ること）として佩を解いて棲逸す。商丘（商山をいう）の巉巖（さうしやう）たる（山のけわしいさま）を願ひ、玉芝を旭日に拾う。蓬桑を操って以って柩と為し、環堵の一室を築けり。薛荔を衣て行くゆく歌う、蘭湯に沐して以って馥郁たり。芬として髪を濯って朝夕す。漸く脩名の茂実を致さんとす。忽ち違棄して（すてること）永逝す、闔閭（かみり）（天上宮の門）を鎖して深く匿る。帝郷を尋ぬるに窺うべからず、沕（ぼく）として（深くかすかなさま）昧々として其れ極まりなし。已みぬるかな、候ぞ帰らざる。吾、將に羞（お供えもの）を脩めんとす。而して墜る涙、沛たり、陰雲曖曖（あたたかい気）として心益々盡む。神、安にか在る、ねがわくは饗けよ。

この文は謾園派の人々の奉ずる古文辞の体で書かれたもので、楚辞の中にある屈原の離騷とか漢代の辞賦とくに漢書の司馬相如伝などの華麗な文体をよく駆使して作っている。大体は東野の経歴とその思想を描いているが古語を用いているのでかなり難解である。これが又古文辞の特色とすることが出来る。この派のものの中でもとくに南郭がこの文体にすぐれている。この作などはその一代表作であろう。

太宰春台と平野金華の墓碑

今回、調査することのできた太宰春台および平野金華の墓碑についても、その結果を付記しておく。春台の墓は天眼寺にある。

天眼寺は、山号を楞伽山と称する。東京都下谷区谷中坂町にある。臨濟妙心寺派の寺院である。延宝二十八年（一六七八）の創建で、松平下総守を開基として、開山は甫格和尚である。太宰春台は（一六八〇—一七四七）名は純、字は徳夫、その住居より春日町を望むことができたので、春台と号した。はじめ幼いころ中野協謙について程朱の学を修めたとき、安藤東野と同門であったのが縁となって、のち、江戸に出て東野に招かれて徂徠の門に入り、古学を講習するようになった。儒学においては護園門の代表的な人物となった。猗蘭侯の詩会にもしばしばその名を列ねているように、東野などとともによき友人仲間であったようである。延享四年五月三十日没、年六十八。猗蘭侯より早くに没している。

墓碑は、正面に春臺太宰先生之墓と隸書し、左側・八行、行三十二字、碑陰十二行、行三十二字、右側四行行三十二字、末尾に友人平安服元喬撰、東都葛辰書とあり、南郭の撰文で松下烏石の書である。そののちに、孝子定保立とある。烏石の書は九成宮醴泉銘風の楷書で、品格も高く、文字の保存状況もよく、ほぼ全文を存している。この文は、南郭先生文集、四編卷八にある。

また、墓碑の前に小石標がある。書店の嵩山房主が、その曾祖父が春台と懇意であり、著述が成るといつも必ず命じて出版させていたので、五十年の遠忌にあたる寛政八年五月に、春台の子供もいなかったため、みづから先生の霊を祀り、自分の後世の子孫が先生の盛徳を忘れないようにと、小碑を立ててそのいわれを刻している。文は左のとおりである。本文五行、行二十字。

春台先生与_ニ我曾祖_ニ相善、故凡_ニ所_ニ撰述_ニ必命上梓其書若干、我家因_レ此而興、今茲寛政八年五月小尽、正当_ニ先生五十年遠忌_ニ、然不幸無_ニ後嗣主祭者_ニ、因聊設_ニ微薄之奠_ニ、酬_ニ洪庇之万一_ニ、所_レ希我後世子孫、厥儀不_レ忒、永以不_レ諼_ニ先生之盛徳_ニ、

嵩山房北林高英謹識

嵩山房は当時江戸の出版業者で、春台のみならず漢籍の多くがこの店で刊行されている。

次ぎに平野金華の墓は蓮光寺にある。蓮光寺は本郷区向ヶ丘二丁目にある浄土宗の寺で、団子坂を上りつめたところ、駒込学園と公園の間の

通りを二百米ほど行ったところに、丹塗りの大きな門のある寺である。慶長六年湯島に創建し、明暦災後、現在の地に移った。山号は金地山と称する。大垣藩の戸田采女正の建てた寺で、開山は玄的尊上人である。その墓地に、平野金華の墓がある。東京都の旧跡として指定されている。墓は正面に「文莊先生之墓」六字を篆書一行に刻している。碑の左側は六行、行二十七字、碑陰は十行、行二十七字、右側は六行（末行とも）、行二十七字。末行に享保壬子秋九月十一日、友人平安服元喬撰とある。この碑文は、南郭先生文集二編卷八13Aに掲載されている。碑には書丹者の名は記されていない。松下烏石の書ではないようであるが、書風は唐楷風でよく似ている。

平野金華（一六八八—一七三二）、名は玄中、字は子和、奥州の人。郷里の名を取って金華と号した。はじめ族人から医者になることをすめられたが、その意志に添わず、儒を志して徂徠の門に入り古文辞を学んだ。猗蘭侯の詩会にはしばしば加わっていたようで、詩文によくその名が見えている。家が貧しく、ほとんど蔵書がなく、左伝、礼記、莊子、通鑑の抄本数巻があるのみであった。常陸の守山藩に仕え、端午の節に主君に見えるとき、薄俸のため新衣がないので、妻の衣をきて出仕し、侯がその貧困を察して加増をしたという逸話がある。磊落な性格で、狂にして奇を好むものと評せられた。享保壬寅（七年一七二二）七月南郭文集の序文をかいているが、その文を読むとその飄逸な風采が想い浮べられる。享保十七年七月二十三日没した。親戚朋友らが鍍金して葬を営んだという。南郭とは親密であったので、その墓碑を撰しているのであろう。文莊はその諡号である。

徳斎原義著先哲像伝に伝記がある。その一節に、「其人となり豪飲を好み劉伯倫（劉伶）のごとく、家産是が為めに乏しけれども聊か意とせず、頗る任侠の義氣ありしぞ」という。またその逸事を述べて「金華は尤も奇を好む人にて、其家に一妾一僕あって、妾の名を月小夜といい、僕の名を染之助といひしよし。又、猫を好みて十八疋ありしとぞ。又、妻の衣服を着して君に見え、佳節の賀を述べしことありしとぞ。実に世を傲弄する一奇人なり。されば南郭の送序にも、子和者東奥一奇士也といひ、また、滑稽不窮人々不能屈之（滑稽きわまらず人々これを屈することあたわず）などといえり。春台の送序にも、子和狂生也又助以酒（子和は狂生なり、又助くるに酒を以てす）など見えたり」とある。

平野金華の文集には、金華藁刪六卷がある。その仕官した常陸の守山侯の世子によって刊行されたものである。首に、そのもつとも親密であった服部南郭の序文がある。欸記に、享保戊申秋八月、平安服元喬撰とあり、享保十三年（一七二八）八月にあたる。つぎに同年三月の越智正珪、（号雲夢）の序がある。越智氏の序は滕元啓が書をかいている。後序として、同年冬十月、源頼寛、守山侯の世子が書いている。これは松下

烏石が代書している。開巻の標題の下には、金華平玄中子和著、守山世子源頼寛子猛輯、中郡、田元秀俊卿校とある。金華の在世中に成ったもので、強仕四十歳の年にあたる。序文の趣旨は、古文辞派のよくところの、文は秦漢、詩は盛唐をさらに敷衍した説で、讓園派の理想をよくえがいている。この本は内閣文庫蔵本がある。

閑散餘録卷下に、「平子和、才を侍^たんで放蕩なり。屢々酒肆娼家に遊ぶ。徂徠、一再これを責む。責むれば過を謝し罪に服す。しかれども其の行跡、もとのごとし。徂徠これを見て、恬然としてとがめず、人或は徂徠に言いて曰く、先生何ぞ又子和を責めざるや。徂徠、答えて曰く、かれは千里の駒なり、度々これをせめば恐らくは逸せん。尋常の御者にては維^つぎ難しとぞ。後やや節を折る。然れども天性狂者の風ありと見ゆ」とある。

また「徂徠の門下に書を能くせし人は東野、平子和（平野金華）、守秀緯（守屋煥明）なり。南郭文集などに西台侯（西代侯）の書を甚だはめたれども、実は然らず、貴人の書なればなり」という。なお、儒林墨宝には東野の書とともに金華の書も刻されている。

春台太宰先生之墓 服部南郭撰

南郭集四編八 1

太宰先生。諱純。字徳夫。号春台。物夫子嘗為^ニ其考栢樹翁^ニ作^ニ墓碑^一。載在^レ集。考以上具

焉。先生生^ニ于信陽飯田^一。幼随^レ考東。稍長。仕^ニ出石侯^一。数年。疾乞^ニ骸骨^一。三不^レ許。乃自去^レ藩。

藩以^ニ輒去^レ錮^レ之。西游^ニ京畿^一十年。是時物夫子。唱^ニ復古学^一于東都。膝東壁縣次公。相助

修^レ業。而次公西歸。東壁乃顧^ニ夫子之門^一。從游日多。然俊傑可^ニ与適^ニ夫子道者^一。猶未^レ至。

東壁幼嘗已同^ニ先生^一受^ニ書^一。為^ニ謙野先生者^一。服^ニ其敏学^一。因思^ニ先生^一。数書招^レ之。会錮亦解。

先生遂東。至則見^ニ物夫子^一。説^ニ其学^一。以為得^レ所^レ歸。乃事^ニ夫子^一。与^ニ東壁二三子^一。講習^ニ古学^一。

博文約礼。敦尚^ニ經典^一。物夫子没。益詳^ニ究先王之道。孔氏之書。爵為^ニ大師^一。弟子諸侯大

夫。至^ニ草野士^一。日益進。先生既勵^ニ已行^一。以^ニ直方^一自居。從游之徒。莫^レ不^レ奉^ニ名教^一唯謹^一。爾。畏^レ

如^ニ大府^一。前後所^レ見諸侯甚多。未^ニ嘗枉^レ已而求^レ見焉。進退必以^レ礼。安^ニ貧樂^レ道。終不^ニ復仕^一。

然其志則曰。儒者之学。折^ニ中孔子^一。孔子所^ニ祖述^一。先王歷聖。政治之道具存焉。用^レ之則

行。如有_レ用_レ我者_二何以哉_一。故又未_レ嘗忘_二經世之用_一。故沼田侯。好_レ學愛_レ賢。礼_二遇先生_一。先生亦深相得焉。侯在_二政府_一。嘗從容語_レ侯曰。方今遭_二不諱之朝_一。然時制所_レ闕。無_レ路居_レ下。上_レ疏陳_レ事。純雖_二微賤_一。幸因_レ侯而若得_レ言_二一二得失_一。或又触_レ聞以_二賤人妄犯_レ上。被_二蔽刑_一。万_一以_レ身有_レ補_二於濟_一衆。亦志所_レ願已。不_レ識_二可否_一。侯曰。試乃可也。遂上_二封事_一。不報。然世已異_二其特立_一。而益敬_二仰其非_一記聞浮華之學_一。先生幼受_二孝經論語於太翁_一。及_二學成_一。益尊尚焉。漢孔氏伝古文孝經。久亡_二彼方_一。独存_二吾邦_一。因校_二訂諸博士家所_一伝。作_二音注_一。而刊之。復因_二沼田侯_一獻_二諸朝_一。政府諸公聞_レ之。爭求_二於侯_一。侯為並貽焉。又本_二師說_一。更加_レ所_レ見。作_二論語古訓及外伝_一。又作_二家語増注_一。以為此三者。庶_レ見_二孔氏遺則_一。故用_レ意特勤焉。先生強記。且於_レ事精詳。其考_二究書籍_一。一字不苟。過必歸_レ正然後止。他所_レ著書凡數十。亦皆學者伝尚焉。書題併_二平日規行_一。門人稻垣長章為_レ誌。松崎惟時狀_レ行。詳_二于_一「
二文_一」。延享丁卯五月晦逝。年六十八。葬_二東都北谷中天眼寺栢樹翁之兆_一。初娶_二末松氏_一。無子。再娶_二前川氏_一。亦無_レ子。子_二養阿武家之子_一。名定保。元喬以_二同盟_一相識三十餘年。乃顧_二夙昔_一。物夫子与_二二三子_一已先逝矣。天復不_レ愁_二遺先生_一。哀哉。因作_レ銘曰。
學之道。師嚴然後道尊。先生之敬_レ教成_レ人。學立道存。」

友人平安服元喬撰

東都葛辰書

孝子 定保立

文莊先生之墓 服部南郭撰

南郭集二編八13A

先生姓平。諱玄中。字子和。奥人也。因号_二金華_一。早孤。既冠。族人謀令_レ學_二医_一東都_一。数年非_二其所_一志。更為_レ儒。初從_二徂來物先生_一問_二修辭_一。物先生亦視_二一

本多猗蘭侯と南郭、東野

隅_レ已_レ。未_レ幾出_ニ其所_レ爲_ニ。所_レ未_ニ嘗聞_ニ。如_レ探_ニ諸懷_ニ。是時物先生方誘_ニ進英才_ニ。乃大奇_レ之。顧謂_ニ喬等_ニ曰。未_ニ嘗見_ニ進取如_レ斯人_ニ。古狂簡哉。吾無_レ所_レ裁。乃日夜益憤勵。所_レ著必機_ニ軸於己_ニ。遂称_ニ大著作_ニ云。爲_レ人磊落好_ニ俶儻瑰璋之事_ニ。

故其結撰。每欲_レ驚_レ人。又滑稽多端。敖_ニ弄一世_ニ。以故或見_レ謂_ニ狂好_ニ奇。然性

喜_レ善疾_レ惡。視_ニ人善_ニ不_ニ雷自_レ己_ニ。若_レ將_レ加_ニ諸膝_ニ不_レ置。飲_レ酒忼慨。時或激烈至_ニ

泣下_ニ。一有_ニ惡声及_ニ其所_レ善_ニ。搯_ニ擊欲_レ反_レ之。甚_ニ於己私_ニ。後乃稍稍折_レ節。然其

義氣著_ニ於心本_ニ。時發_ニ於感慨_ニ。有_ニ似而非者_ニ。蠹_ニ害君子_ニ。乃曰。彼何人斯。爾

居徒幾何。嘻笑耳。然亦微_ニ示其絶_ニ。作_レ文恒称。独不_レ見_ニ斗量_ニ乎。人非_レ不_レ容

而出_レ之_ニ參。我即一斗亦用。一石亦用。不_レ知_ニ其他_ニ。卒後探_ニ其家_ニ。素貧不_レ

藏_ニ一書_ニ。所_レ抄數卷已。人始服_ニ其才量_ニ。後爲_ニ守山侯儒官_ニ。年四十五卒。享

保十七年七月廿三日也。葬_ニ東都城北蓮光寺_ニ。配神田氏。生_ニ三男二女_ニ。

長元幹。字国礼。女甫十二。餘皆未_レ亂没。先生貧甚。而其所_レ善者至。擊_レ鮮

極_レ驪。未_ニ嘗以_レ饗爲_レ辭。每至_レ令_ニ有_ニ急不_レ得_レ去。其愛_レ人亦出_ニ天性_ニ。及_レ卒。知与_ニ

不_レ知。皆爲_レ流_レ涕。既客死無_レ親。則姻家諸友。爭_レ義營_レ葬。遂立_レ石。守山世子

好_レ學師_ニ重先生_ニ。先_レ是刪_ニ其稿行_ニ于世_ニ。於_レ是世子即謚_ニ文莊先生_ニ。命_レ喬作

碑。喬已爲_レ友二十餘年。先生率不_レ可_レ人。而推_レ喬居_ニ一日長_ニ。亦其義氣所_レ

許乃爾。皆謂如_ニ真兄弟_ニ。至_ニ素服受_レ弔。遂不_ニ敢辭_ニ。作_レ銘曰。

天仮_ニ其文不_レ仮_レ齒。千載懔懔神不_レ死。神不_レ死兮安_ニ其理_ニ。先生之墓觀_ニ此里_ニ

享保壬子秋九月十一日

友人平安服元喬撰